

## 郷土ゆかりの作家紹介

作家名	人物紹介																				
浅井洌	<p>「信濃の国」の作詞者の浅井洌（あさい・れつ、通称「きよし」）は、幕末の嘉永2年（1849年）に松本藩士の大岩家に生まれ、同藩浅井家の養子となりました。松本藩が廃され筑摩県が置かれてからは、明治5年に筑摩県学校の教師となり、その後は小学校（松本開智学校など）、松本中学校（現松本深志高校）を経て、明治19年に県尋常師範学校（現信州大学教育学部）に移り、大正15年に退職するまでの40年間にわたって教員養成にあたり、約5千人の教員を送り出しました。国漢、習字を専門に教えましたが、「信濃の国」を生む原動力になったのは、国風つまり旧派和歌に若い頃から親しんできたことにあります。中央歌壇では旧派は一向に人気は出ませんでした。浅井はあまりそういうことは意識せず、ひたすら国風に精進しました。</p> <p style="text-align: center;">さむければ筆もえとらで冬籠り春待ちわぶるうづみ火のもと</p> <p>さて、「信濃の国」は明治32年に浅井が作詞し、翌年に同校教諭の北村季晴が曲をつけました。浅井と北村は隣りあわせに住んでおり、浅井は、「北村君の曲は、豆腐屋が荷をかついでとんで行くのにも合うみたいな、調子のいい曲だな」と喜んだとのこと。</p> <p>「信濃の国」は当時の師範学校の行事などで歌われていました。その時の学生が教師として県下に赴任し、「信濃の国」を各小学校で教えるので全县に広がり、連綿と歌い継がれたことで、昭和43年には県歌として制定されました。退職後は松本市の家で悠々自適の生活を送り、昭和13年に90歳で永眠しました。松本深志公園噴水の傍らに浅井の歌碑があります。この歌もまた多くの人々に愛されています。</p> <p>わき出て涼しかりけり立ちよればそでにもかかる真玉しら玉</p> <p>&lt;参考資料&gt;</p> <table border="0" style="width: 100%;"> <thead> <tr> <th style="text-align: left;">書名</th> <th style="text-align: left;">/著者名</th> <th style="text-align: left;">/出版社</th> <th style="text-align: left;">/出版年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>浅井洌</td> <td>松本市教育会浅井洌遺稿集編集委員</td> <td>松本市教育会</td> <td>1990</td> </tr> <tr> <td>うたの信濃</td> <td>草田照子</td> <td>信濃毎日新聞社</td> <td>1997</td> </tr> <tr> <td>近代を築いたひとびと2</td> <td>坂本令太郎</td> <td>信越放送</td> <td>1971</td> </tr> <tr> <td>「信濃の國」物語</td> <td>中村佐伝次</td> <td>信濃毎日新聞社</td> <td>1978</td> </tr> </tbody> </table>	書名	/著者名	/出版社	/出版年	浅井洌	松本市教育会浅井洌遺稿集編集委員	松本市教育会	1990	うたの信濃	草田照子	信濃毎日新聞社	1997	近代を築いたひとびと2	坂本令太郎	信越放送	1971	「信濃の國」物語	中村佐伝次	信濃毎日新聞社	1978
書名	/著者名	/出版社	/出版年																		
浅井洌	松本市教育会浅井洌遺稿集編集委員	松本市教育会	1990																		
うたの信濃	草田照子	信濃毎日新聞社	1997																		
近代を築いたひとびと2	坂本令太郎	信越放送	1971																		
「信濃の國」物語	中村佐伝次	信濃毎日新聞社	1978																		

	県歌 信濃の国	市川健夫、小林英一	銀河書房	1984																												
<b>有賀喜左衛門</b>	<p>有賀喜左衛門は、1897年(明治30年)上伊那郡朝日村平出(現辰野町)に生まれ、道夫と命名されました。その後2歳で母が、9歳で父が亡くなり、7代目喜左衛門を継ぐこととなります。旧制諏訪中学校から仙台の第二高等学校を経て、京都帝国大学へ入学しましたが、翌年退学して東京帝国大学に学びました。24歳の時に卒業論文制作のため慶州から平壤まで旅行した際、エリートによる美術の基盤にある民衆生活を知る必要を痛感し、そのことが後に日本人と日本文化の欠点の研究を志していくきっかけとなりました。その後、白樺派運動の影響や、友人の岡正雄に柳田國男を紹介されて民俗学を学び、雑誌『民族』や、『民俗学』の編集委員を務めました。次いで、義弟池上隆祐らと共に、民俗学研究の同人雑誌『郷土』を発刊しました。そして農村社会学の研究に進み、多くの著作や論文、書評を発表し、なかでも『日本家族制度と小作制度』(河出書房, 1943年)は高く評価されました。これにより、喜左衛門は東京大学文学部から文学博士を受けています。1949年(昭和24年)から東京教育大学で、1957年(昭和32年)からは慶應義塾大学で後進を育成し、1965年(昭和40年)日本女子大学学長に就任しました。そして1979年(昭和54年)12月20日、信州大学附属病院において、肺炎のため82歳の生涯を閉じました。</p> <p>&lt;参考資料&gt;</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>書名</th> <th>／著者名</th> <th>／出版社</th> <th>／出版年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>有賀喜左衛門著作集全12巻</td> <td>有賀喜左衛門</td> <td>未来社</td> <td>2001</td> </tr> <tr> <td>農村社会の研究</td> <td>有賀喜左衛門</td> <td>農山漁村文化協会</td> <td>1981</td> </tr> <tr> <td>日本の家族</td> <td>有賀喜左衛門</td> <td>至文堂</td> <td>1965</td> </tr> <tr> <td>一つの文化論</td> <td>有賀喜左衛門</td> <td>未来社</td> <td>1976</td> </tr> <tr> <td>文明・文化・文学</td> <td>有賀喜左衛門</td> <td>お茶の水書房</td> <td>1980</td> </tr> <tr> <td>柳田国男と信州地方史</td> <td>伊藤純郎</td> <td>刀水書房</td> <td>2004</td> </tr> </tbody> </table>				書名	／著者名	／出版社	／出版年	有賀喜左衛門著作集全12巻	有賀喜左衛門	未来社	2001	農村社会の研究	有賀喜左衛門	農山漁村文化協会	1981	日本の家族	有賀喜左衛門	至文堂	1965	一つの文化論	有賀喜左衛門	未来社	1976	文明・文化・文学	有賀喜左衛門	お茶の水書房	1980	柳田国男と信州地方史	伊藤純郎	刀水書房	2004
書名	／著者名	／出版社	／出版年																													
有賀喜左衛門著作集全12巻	有賀喜左衛門	未来社	2001																													
農村社会の研究	有賀喜左衛門	農山漁村文化協会	1981																													
日本の家族	有賀喜左衛門	至文堂	1965																													
一つの文化論	有賀喜左衛門	未来社	1976																													
文明・文化・文学	有賀喜左衛門	お茶の水書房	1980																													
柳田国男と信州地方史	伊藤純郎	刀水書房	2004																													
<b>池田満寿夫</b>	<p>国際的な版画家で、小説でも芥川賞を受賞したほか、詩、映画監督、写真、陶芸、書など多彩な芸術活動で知られた池田満寿夫は、1934年旧満州国の奉天市(現中国遼寧省瀋陽)に生まれました。終戦の混乱の中で、引き揚げを経験し、両親の郷里長野市で生活を始めます。</p> <p>学制改革による新制中学校で「将来の私の方針に重要な影響を与えてくれた」と述懐する担任の教師に絵(と作文)の才能を見出され、長野北高校(現長野高校)に進学してからは、画家への決意を抱くようになります。その手段として芸大に入学することを目指しましたが、画集・文学・映画などから得る「想像だけ」で</p>																															

描く方法への傾倒は、芸大の受験に必要なアカデミックな画法から遠ざかることになり、東京芸術大学の受験に失敗。上京し、国画会研究所でデッサンの勉強をしながら、電球や靴下の訪問販売、銀座・新宿・上野などで似顔絵描きをして生計を立てていましたが、以後2度の東京芸大の受験にも不合格となり、芸大受験を断念することとなります。

池田の才能が、その日暮らしの生活の中で損なわれることを危惧した画家・瑛九の勧めで、1956年、日本ではまだ誰も本格的に取り組んでいなかった色彩銅版画の制作に転じます。1960年の第2回東京国際版画ビエンナーレ展で文部大臣賞を受賞して一躍脚光を浴び、1966年ベネチア・ビエンナーレ国際版画部門大賞を獲得し、国際的な評価も高まりました。

美術以外の分野では、1971年に処女作『ガリヴァーの遺物』を発表してから6年後の1977年『エーゲ海に捧ぐ』で第77回芥川賞を受賞。同作品の映画化にも、自ら脚本・監督をつとめ、カンヌ映画祭にも出品しました。

80年代に入ってから、初の写真展、映画第2作『窓からローマが見える』の制作、陶芸への精力的な取り組み、レコードの発表、写楽研究など幅広い芸術活動を展開し、一方で版画制作も衰えることなく続けられました。

陶芸作品がブロンズに鑄造されるようになり、大型彫刻や野外彫刻にも取り組み、長野五輪スピードスケート会場となった「エムウェーブ」正面のモニュメント「長野オリンピック讃歌」も制作しています。

長野市松代町に「池田満寿夫美術館」の開館を目前に控えた1997年3月8日、急性心不全のため静岡県熱海市で亡くなりました。

<参考資料>

書名	／著者	／出版社	／出版年
私の調書 (1968年、美術出版社刊の文庫版)	池田満寿夫	新風舎	2005
思い出の池田満寿夫	宮澤壯佳ほか編	池田満寿夫美術館	1998
池田満寿夫 無名時代から世界のスターへ	宮澤壯佳ほか編	池田満寿夫美術館	1999
池田満寿夫 流転の調書	宮澤壯佳	玲風書房	2003
池田満寿夫 (日本現代版画)	池田満寿夫	玲風書房	2003

## 井沢修二

伊沢修二は嘉永4年（1851年）高遠藩士の家に生まれました。藩校の進徳館で学んだ後1867年江戸へ出府。大学南校（現東京大学）へ進学して新時代のエリートとしての第一歩を踏み出しました。1875年アメリカへ留学してグラハム・ベルから詩話術を、ルーサー・メーソンから音楽教育を学び、またハーバード大学で理化学を修めて地質研究も行いました。留学中の1876年に日本人として初めて電話を使っています。帰国後は近代音楽教育や吃音矯正などに力をそそぎ、教育行政全般に腕をふるいました。ダーウィンの進化論を初めて日本に紹介したのも修二です。東京師範学校長、東京音楽学校長、東京盲啞学校長、台湾民生局学務部長などを歴任しつつ信州教育を下から盛り上げました。 なきがらはいづこの土となりぬとも みたまはここにとどまりたまへ 永遠（とこしえ）ここにしづまりたまへ教育が近代国家確立への重要な布石だった時代、道なき道を突き進んだ伊沢修二。1917年脳出血のため66歳でその生涯を閉じました。

### <参考資料>

書名	／著者名	／出版社	／出版年
信州人物風土記・近代を拓く15 伊沢修二	宮坂勝彦	銀河書房	1989
世界と地域を見つめた長野県教育	長野県立歴史館		2002
楽石・伊沢修二先生	記念事業会		1919
楽石自伝教界周遊前記	記念事業会	大空社	1988

いぬいとみ  
こ

いぬいとみこ（本名乾富子、戸籍表記富子）は、1924（大正13）年3月3日、静岡県に生まれ（自筆年譜等では東京生まれとしている）、2歳で麻布区（現港区）に移り住みました。また、4歳のときに大森区に転居し、その家の前のキリスト教会付属の大森めぐみ幼稚園に入園しました。この幼稚園時代から、いぬいとみこの文学好きは始まったといえます。少女期のいぬいとみこの精神的基盤は、おもに外国文学及びキリスト教によって育まれていました。

1941（昭和16）年4月11日、日本女子大学校国文学部の42回生として入学し、一年次のみ在籍。この頃、宮沢賢治の諸作品にふれ、児童文学を志しました。この年のクリスマスに目黒の行人坂教会で洗礼を受けました。宮沢賢治文学との出会いの経緯については「たまたま私に宮沢賢治の世界を知らせてくれた林小枝子さんという、日本女子大時代の友人」という存在がいたこともいぬい自身によって語られています。

その後、いぬいは京都平安女学院専攻部保育科を卒業。1944（昭和19）年から保母として約2年間、東京、山口、京都で勤めました。

1950（昭和25）年岩波書店に入社し“岩波少年文庫”等の編集に従事しながら、児童文学の創作を続けました。その間、1957（昭和32）年『ながいながいペンギンの話』で毎日出版文化賞を、1961（昭和36）年『木かげの家の小人たち』で第4回アンデルセン賞国内賞を受賞するなど、幼年童話や少年少女向きの空想物語において新たな児童文学世界を切り拓いてゆきました。1965（昭和40）年には家庭文庫“ムーシカ文庫”を始めました。1970（昭和45）年岩波書店を退社し、執筆に専念。2002（平成14）年1月16日死去。享年77歳。

いぬいとみこの作品は、海外のすぐれた児童文学を摂取しながら、女子大時代に出会った宮沢賢治作品世界を契機に、日本の風土のなかに自らの文学の場を求める志向へと向かい、黒姫の自然のなかに、あるいは広島・山口及びそれらに通じる戦跡に、その場を見出し、さらにそこで子どもや動物の生きた姿を映し出す児童文学世界を切り拓いたといえます。

<参考資料>

書名	／著者名	／出版者	／出版年
日本女子大学校に学んだ文学者たち	青木生子・岩淵宏子	翰林書房	2004
新訂作家・小説家人名事典		日外アソシエーツ	2002
ながいながいペンギンの話	いぬいとみこ	理論社	1999
木かげの家の小人たち	いぬいとみこ	福音館書店	2002

<p><b>井上井月</b></p>	<p>1822年頃越後（現・新潟県長岡市）に生まれ、1887年美篤（みすず）村（現・伊那市）で没しました。漂泊の俳人といわれ北海道から近畿方面など諸国を旅した末伊那谷に住みつき、俳諧に志ある人々を訪ね歩き、食べ物や泊まる所などを提供してもらいながら放浪生活を送ったと伝えられています。1852年には善光寺町（現・長野市）にも足跡を残しています。井月には愛用の言葉や妙な口癖が多く、最も有名なものに「千両千両」という言葉があります。挨拶や感謝の気持ち驚きなど何でも「千両千両」と言って済ませていたと伝えられています。酒を愛し、酒を飲めば「千両千両」と唱えていた井上井月。井月の詠んだ秋の句を紹介しす。「新蕎麦に味噌も大根も誉められし」「塗り下駄に妹が素足や今朝の秋」「草木のみ吹くにはあらず秋の風」「初鮭やほのかに明けの信濃川」「駒ヶ根に日和定めて稲の花」</p> <p>&lt;参考資料&gt;</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>書名</th> <th>／著者名</th> <th>／出版社</th> <th>／出版年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>井月の風景</td> <td>春日愚良子</td> <td>ほおずき書籍</td> <td>2006</td> </tr> <tr> <td>俳人井月</td> <td>長谷川亮三</td> <td>信濃毎日新聞社</td> <td>1930</td> </tr> <tr> <td>漂鳥のうた；井上井月の生涯</td> <td>瓜生卓造</td> <td>牧羊社</td> <td>1982</td> </tr> <tr> <td>井月全集</td> <td>下島勲・高津才次郎</td> <td>伊那毎日新聞社</td> <td>1974</td> </tr> <tr> <td>井月全句集</td> <td>信州井月会</td> <td>伊那毎日新聞社</td> <td>2001</td> </tr> </tbody> </table>	書名	／著者名	／出版社	／出版年	井月の風景	春日愚良子	ほおずき書籍	2006	俳人井月	長谷川亮三	信濃毎日新聞社	1930	漂鳥のうた；井上井月の生涯	瓜生卓造	牧羊社	1982	井月全集	下島勲・高津才次郎	伊那毎日新聞社	1974	井月全句集	信州井月会	伊那毎日新聞社	2001
書名	／著者名	／出版社	／出版年																						
井月の風景	春日愚良子	ほおずき書籍	2006																						
俳人井月	長谷川亮三	信濃毎日新聞社	1930																						
漂鳥のうた；井上井月の生涯	瓜生卓造	牧羊社	1982																						
井月全集	下島勲・高津才次郎	伊那毎日新聞社	1974																						
井月全句集	信州井月会	伊那毎日新聞社	2001																						
<p><b>いわさきちひろ</b></p>	<p>いわさきちひろ（本名：松本知弘、旧姓：岩崎）は1918年福井県に生まれ翌年東京に移りました。14歳のとき岡田三郎助のもとでデッサンと油絵の勉強を始め、後に藤原行成流の書を学び、絵は中谷泰、丸山俊にも師事し、初山滋の影響も大きく受けたようです。</p> <p>1939年20歳で結婚し、共に満州・大連（現中国）へ渡りますが、わずか8ヶ月後夫の自殺のため帰国します。1945年空襲で家を焼かれ、母の実家がある松本市に疎開しました。ちひろの両親は戦後松川村に開拓農民として移住しており、長野とのつながりが深まっていきました。</p> <p>1950年31歳のとき松本善明と再婚。その際いくつかの約束を文章にしています。</p> <p>人類の進歩のために最後まで固く結びあって闘うこと</p> <p>お互いの立場を尊重し、とくに芸術家としての妻の立場を尊重すること夫は弁護士をめざして勉強中の身でした。ちひろは幼い息子猛を松川村の両親に預けて働きます。そしてこの頃から絵本画家として世に認められていきました。1952年東京練馬区に移り住み、以降22年間そこで創作活動をし、現在は「ちひろ美術館・東京」となっています。</p> <p>1974年いわさきちひろは原発性肝ガンのため55歳の生涯を閉じました。</p> <p>1997年「安曇野ちひろ美術館」が開館しました。館長はちひろの長男松本猛氏です。</p>																								

	<p>&lt;参考資料&gt;</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>書名</th> <th>／著者名</th> <th>／出版社</th> <th>／出版年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>妻ちひろの素顔</td> <td>松本善明</td> <td>講談社</td> <td>2000</td> </tr> <tr> <td>ちひろの信州</td> <td>松本猛</td> <td>郷土出版社</td> <td>2005</td> </tr> <tr> <td>ぼくが安曇野ちひろ美術館をつくったわけ</td> <td>松本猛</td> <td>講談社</td> <td>2002</td> </tr> <tr> <td>いわさきちひろ</td> <td>松永伍一</td> <td>講談社</td> <td>2005</td> </tr> </tbody> </table>	書名	／著者名	／出版社	／出版年	妻ちひろの素顔	松本善明	講談社	2000	ちひろの信州	松本猛	郷土出版社	2005	ぼくが安曇野ちひろ美術館をつくったわけ	松本猛	講談社	2002	いわさきちひろ	松永伍一	講談社	2005
書名	／著者名	／出版社	／出版年																		
妻ちひろの素顔	松本善明	講談社	2000																		
ちひろの信州	松本猛	郷土出版社	2005																		
ぼくが安曇野ちひろ美術館をつくったわけ	松本猛	講談社	2002																		
いわさきちひろ	松永伍一	講談社	2005																		
<p><b>臼井吉見</b></p>	<p>臼井吉見は 1905 年南安曇郡烏川村（現安曇野市堀金）に生まれました。松本中学（現松本深志高校）から松本高等学校（現信州大学）、東京帝国大学（現東京大学）へと進み、卒業後伊那で教職に就きますが、親友が興した筑摩書房を助けるため上京。戦後は名編集者として活躍するとともに 1946 年総合雑誌「展望」を創刊し多くの文芸評論、社会時評を書きました。</p> <p>「残雪の高い山々がうしろにひかえた、いまごろの安曇野ほど美しいところを良は知らなかった。見渡すかぎり紫雲英（れんげ）の花で埋もれ、そこかしこに土蔵の白壁がちらほらする」</p> <p>吉見が長編小説「安曇野」のペンを執ったのは 59 歳のときで、以来病で中断したときもありましたが 68 歳まで書き継ぎました。</p> <p>安曇野に生まれ安曇野を書き安曇野を愛した作家臼井吉見は、1987 年 82 歳の生涯を静かに閉じました。</p> <p>&lt;参考資料&gt;</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>書名</th> <th>／著者名</th> <th>／出版社</th> <th>／出版年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>臼井吉見の「安曇野」を歩く</td> <td>市民タイムス</td> <td>郷土出版社</td> <td>2005</td> </tr> <tr> <td>臼井吉見集 1～ 5</td> <td>臼井吉見</td> <td>筑摩書房</td> <td>1985</td> </tr> <tr> <td>安曇野 1～5</td> <td>臼井吉見</td> <td>筑摩書房</td> <td>1965-1974</td> </tr> <tr> <td>「展望」ある編集者の戦後</td> <td>臼井吉見</td> <td>創世記</td> <td>1977</td> </tr> </tbody> </table>	書名	／著者名	／出版社	／出版年	臼井吉見の「安曇野」を歩く	市民タイムス	郷土出版社	2005	臼井吉見集 1～ 5	臼井吉見	筑摩書房	1985	安曇野 1～5	臼井吉見	筑摩書房	1965-1974	「展望」ある編集者の戦後	臼井吉見	創世記	1977
書名	／著者名	／出版社	／出版年																		
臼井吉見の「安曇野」を歩く	市民タイムス	郷土出版社	2005																		
臼井吉見集 1～ 5	臼井吉見	筑摩書房	1985																		
安曇野 1～5	臼井吉見	筑摩書房	1965-1974																		
「展望」ある編集者の戦後	臼井吉見	創世記	1977																		

## 臼田 亜浪

明治 12 (1879) 年 2 月 1 日、長野県北佐久郡小諸町 (現小諸市) に文次郎の長男として生まれました。本名卯一郎。母さいは、亜浪が 4 歳の時亡くなり、翌年継母かねを迎えています。小諸小学校に学び、明治 27 (1894) 年に卒業しその頃より中村嵐松親子に月並俳句を学び、「一兎」と号しました。翌年には小諸義塾に学び、町役場に勤務した後に上京し工談会に寄宿しました。工手学校予科、明治法律学校と転々となりましたが、病のため一時帰郷しました。明治 32 (1899) 年、再び上京し、同郷の政治家石塚家に寄寓します。この頃より俳句熱が高まり、日本派の作風に親しみました。明治 34 (1901) 年には和仏法律学校 (現法政大学) に転じ、『文庫』に句を投じています。冬には帰郷し深井すてと結婚しその頃から短歌を与謝野鉄幹、俳句を高浜虚子に教えるを請うています。明治 36 (1903) 年 7 月に継母を失い、9 月には妻を伴って上京し靖国神社前に家を構え、寄宿舎羅漢洞を経営し同郷の青年たちを止宿させました。翌年、法政大学を卒業した後、麴町三番町に移り、茅原華山主筆の雑誌『向上主義』の編集にあたります。翌年には電報新聞社に入社。政治部を担当し、7 月には社会部長となりました。その後、大阪毎日との合併により毎日電報となり、経済部に転じました。明治 41 (1908) 年「横浜貿易新報」編集長、翌年「やまと新聞」編集長とジャーナリストとして活躍する一方、石楠の筆名で「西郷南洲」に関する著作を刊行しています。大正 3 (1914) 年の時、腎臓を病み信州渋温泉に静養中、偶然虚子に会い、俳壇への復帰を決意します。その後、『ホトトギス』子規 13 回忌記念号に「俳句に甦りて」を寄稿し、10 月には大須賀乙字と知り合い新しい俳句雑誌の創刊を計画しました。目的は有季定型の新傾向俳句を作り出すことでした。11 月「石楠社」を設立。第 1 回句会を開きました。そして乙字の援助を得て翌年 3 月には俳誌『石楠』を創刊し、生活に根ざした感情を自然観照と一体化するのを目的としました。翌 5 年には一切の業務を絶って俳句に専念することになりました。昭和 15 (1940) 年、軽い脳溢血に倒れましたが後に復帰。しかし昭和 26 (1951) 年、3 度目の発作に倒れ、意識不明のまま 11 月 11 日死去。73 歳でした。句集に『亜浪句抄』、『旅人』、『白道』などがあります。

### <参考資料>

書名	／著者名	／出版社	／出版年
臼田亜浪全句集	臼田亜浪	臼田亜浪全句集刊行会	1977
現代 100 名句集 1	正岡子規ほか	東京四季出版	2004
亜浪句抄	臼田卯一郎	石楠社	1925
旅人	臼田亜浪	交蘭社	1937
白道	臼田亜浪	北信書房	1946



## 大川悦生

著者の大川悦生は1930年埴科郡坂城町に生まれ、幼少期からは東京で過ごしました。しかし戦中は再び疎開で坂城に戻り、1945年県立上田中学校3年の時に割当で海軍予科兵学校に出願します。ところが広島へ赴く直前に敗戦を迎え、当時の大人のすべてを信じられなくなりました。後に大川自身は「このことが、確かなものを民衆の伝承文芸に求め、また戦争・原爆の体験を伝える仕事につながった」（『こどもの耳を育てる』の著者略歴より）と書いています。早稲田大学文学部卒業後、30歳になってから民話の聞き書きで全国各地を歩き、民話の再話、再創造に尽力しました。この仕事は、誰でも一度は読んだことがある『三ねんねたろう』に代表される、いわゆる「むかしばなし絵本」という形で広く普及し、評価されています。そして大川は昔話の採集に歩いていた中で、戦争について語りたという民衆の熱気に影響を受け、ヒロシマ、ナガサキを題材にして「戦争民話」という分野を開拓していきました。そうして作られた民話には動物や木を題材にしているものが多く、『おかあさんの木』（1969）や、『はとよひろしまの空を』（1979）、『アオギリよ芽を出せ』（1990）などを挙げることができます。大川は東京に住みながらも区民菜園を耕すことに精を出し続けたそうです。それは「土の感触を忘れてしまったら農民と対等に話ができなくなるし、民話から遠ざかることにもなる」という理由からでした。1998年3月27日、すい臓がんのため67歳で死去しました。

（参考資料：大川悦生/著『現代に生きる民話』NHK ブックス, 1975 和田登/著『民話の森・童話の王国』オフィスエム, 2002 和 大阪国際児童文学館/編『日本児童文学大事典』大日本図書, 1993)

### <参考資料>

書名	著者	出版社	出版年
『アオギリよ芽を出せ』	大川悦生	新日本出版社	1992
『おかあさんの木』	大川悦生	ポプラ社	1979
『子どもに聞かせる日本の民話』	大川悦生	実業之日本社	1998
『へっこきあねさがよめにきて』	大川悦生	ポプラ社	1972

## 大下宇陀児

大下宇陀児は探偵小説作家。別名、XYZ。

1896年（明治29）長野県上伊那郡箕輪町に生まれました。本名は木下龍夫です。九州帝国大学（現在の九州大学）工学部応用化学科を卒業後、農務省臨時窒素研究所に勤務し、文壇における同僚の甲賀三郎の活躍に触発されて小説を書き始めました。

1925年「金口の巻煙草」でデビュー。「新青年」を舞台に、江戸川乱歩や夢野久作と並ぶ探偵小説の人気作家として活躍し、戦後はNHKの人気ラジオ番組「二十の扉」の解答者として人気を博しました。

1951年「石の下の記録」で第4回探偵小説作家クラブ賞を受賞。探偵小説だけでなくSF小説にも関心を示し、「空中国の大犯罪」や「ニッポン遺跡」などの作品を執筆しました。また、星新一の才能を見出しました。

1966年（昭和41）に心筋梗塞で死去しました。

### <参考資料>

書名	／著者名	／出版社	／出版年
奇蹟の処女	大下宇陀児	松竹株式会社	1946
凧	大下宇陀児	早川書房	1946
欠伸する悪魔	大下宇陀児	世間書房	1947
不思議な母	大下宇陀児	オリオン社	1947
石の下の記録	大下宇陀児	岩谷書店	1951

**大島蓼太**

大島蓼太は、江戸時代に活躍した信州出身の俳人です。芭蕉を尊び、芭蕉に復ることを理想とした天明五俳傑の一人です。天明五俳傑には、他に与謝蕪村、加舎白雄、加藤暁台（かとう しゅんたい）、高桑闌更（たかくわ らんこう）がいます。大島蓼太は 1718（享保 3）年、伊那郡飯島本郷村（現上伊那郡飯島町本郷）の大島に生まれたといわれています。1740（元文 5）年 23 才の時、蕉門系の雪中庵二世桜井吏登（さくらいりとう）の門に入り、俳諧修行を始めます。芭蕉追慕の念の高じた蓼太は、1742（寛保 2）年 4 月、吏登らに見送られて、奥の細道を巡る奥州行脚に出かけました。その帰途郷里の伊那に立ち寄り、伊那街道飯島宿南はずれの高台臂曲りの地に郷里の門人らと「雪塚（雪中庵）の句碑」を建てたといわれています。生涯、雪門の隆盛に力を尽くすとともに、江戸深川の要津寺に芭蕉の「俳塚」（おもかげづか）を築き、大供養会を催したり、「芭蕉翁真蹟集」や「芭蕉庵再興集」を出版するなど蕉風の復帰に尽くし多くの門人を有しました。また、芭蕉ゆかりの地を中心に旅を重ね、東海道の往復だけでも 19 回、奥州へも 2 回出かけています。作品には「五月雨やある夜ひそかに松の月」「世の中は三日見ぬ間の桜かな」「秋の水富士をひたして猶寒し」（諏訪湖）、「ゆく秋やみな橋かけて落水」（辞世）などの句があり、大衆の人気を博しました。1787（天明 7）年 9 月 7 日 70 才で大往生をとげ、深川要津寺に葬られました。

## &lt;参考資料&gt;

書名	/著者名	/出版社	/出版年
俳人大島蓼太と飯島	桃澤匡行	飯島町郷土研究会	1996
長野県百科事典補訂版	信濃毎日新聞社	信濃毎日新聞社	1981
和歌・俳諧史人名事典	日外アソシエーツ	日外アソシエーツ	2003

**太田水穂**

太田水穂は明治 9（1876）年 12 月 9 日、東筑摩郡原新田村（現在の塩尻市広丘）に父太田億五郎、母くりの第 6 子として誕生しました。本名は貞一で、號は「みずほのや」です。父はまじめな努力家で、幼い水穂に「孝経」や「百人一首」を教えてくれました。

明治 16（1883）年 2 月、隣村の野村小学校に入学、明治 25（1892）年 3 月、塩尻高等小学校を卒業する前後には『日本少年』や『少年園』に和歌・文章を投稿するようになりました。

小学校の雇教師を経て、明治 27（1894）年 4 月に長野師範学校へ入学。同級に塚原俊彦（島木赤彦）等、また上級に高野辰之等がおり、水穂の人間形成に重大な影響を与える時期となりました。在学中の明治 29（1896）年には『文学界』『世界の日本』に新体詩を投稿、同 30（1897）年には『信濃毎日新聞』に「和歌日抄」が掲載されました。

明治 31（1898）年 3 月、長野師範学校を卒業し、4 月に東筑摩郡山辺小学校へ赴

任します。翌年6月には和田村小学校へ転任し、窪田空穂と知り合います。そして、明治33（1900）年2月に新派和歌の同好会「この花会」を結成します。当時の松本平の歌壇は、幕末に有力な桂園歌人である内山真弓と萩原貞起の二人がいた関係で桂園派の長老が取り仕切っており、中央歌壇の新しい傾向とは正反対の位置にありました。そんな中で、松本とは目と鼻の先である和田村を中心として、20代の素人和歌愛好者が結成した「この花会」が烈しい批判を受けたことは当然のことでした。しかしながら、発足後1年ほどのちの明治34（1901）年春、「この花会」の詠草が水穂の評語を沿えて信濃日報紙上に掲載されるようになるとその活動は一段と活発になり、信濃の一角で新派和歌の流れを形成していきました。明治35（1902）年2月に処女歌集『つゆ草』、同38（1905）年には歌集『山上湖上』を友人久保田山百合（島木赤彦）と共著で出したあと、同36（1903）年から勤めていた松本高等女学校を同41（1908）年4月に退職し、上京します。その後の活躍は、詩歌のみにとどまらず、評論・小説などを多くの新聞や雑誌に発表していることから分かります。

また、大正6（1917）年5月に肺炎で生死の境を彷徨いますが秋には回復して、以後は芭蕉・良寛に強く心を寄せるようになり、さらに古典研究へと転じていきます。

多くの著書を残した水穂ですが、昭和27（1952）年6月、脳溢血のため倒れた後は病床に伏せ、同30（1955）年元旦に亡くなりました。戒名は「潮音院香莊水穂居士」で、北鎌倉の東慶寺に葬られています。

<参考資料>

書名	/著者名	/出版社	/出版年
太田水穂全歌集	太田水穂	短歌新聞社	1984
太田水穂 短歌シリーズ・人と作品 14	太田青丘	桜楓社	1980
現代日本文学大系 28	若山牧水他	筑摩書房	1973
明治文学全集 63	佐々木信綱他	筑摩書房	1967

## 尾崎喜八

人道的自然詩人である尾崎喜八は 1892 年に東京都京橋の回漕問屋の長男として生まれ、1974 年に鎌倉で没しました。長野県との関わりは、諏訪郡富士見町（在住 1946～1952 年当時は富士見村）にあります。幼い頃から文学と自然を愛していた尾崎は、19 歳の時雑誌「スバル」等で知った高村光太郎の作品や人柄、思想に強い影響を受けました。23 歳の時父親との確執が元で廃嫡となり、家を出た尾崎は武者小路実篤や長与善郎と出会い文学の幅を広げ、30 歳の時最初の詩集「空と樹木」を刊行しました。その後も詩集や翻訳書を刊行し、36 歳の時登山家河田みき（木へんに貞）と出会い山旅を多くするようになり、詩集「旅と滞在」や散文集「山の絵本」等、山に生きる人々に愛される作品をいくつも発表しました。そんな尾崎も戦時中は戦争協力詩を多く発表し、敗戦後『戦争犯罪者』『侵略賛美詩人』と呼ばれる立場にある己の存在を恥じ、人の目に触れることない場所でひっそりと余生を過ごしたいと願いました。この頃の尾崎は空襲で家を焼かれ、親戚や知人の家を転々としているなかで眼を病み、心身共に疲れ果てていました。そんな尾崎を自然豊かな富士見の地に誘ったのは、既に他家へ嫁いでいた一人娘の栄子でした。娘の嫁ぎ先である石黒家の縁で借りることができた元伯爵渡辺昭所有の別荘・分水荘は大きな住まいでしたが、尾崎夫婦はその一部だけ使って暮らしました。台所はなく、水は外へ汲みに行き、風呂は屋外に置かれたドラム缶という生活でしたが、尾崎には自然の美しさや季節の移り変わりを直に感じる生活が出来る生活はあまり苦にはならなかったようです。自然を愛し、山旅を愛していた尾崎は、富士見町の豊かな自然と心温かい土地の人たちとの交流に癒され、珠玉の詩集「花咲ける孤独」を筆頭にいくつもの作品を作りました。また富士見には富士見高原療養所があり、ここに入所していた音楽や文学を愛する若者たちとの交流も尾崎を楽しませました。「富士見町高原のミュージアム」には、尾崎の富士見在住時代の資料などが常時展示されています。

### <参考資料>

書名	／著者	／出版社	／出版年
花咲ける孤独	尾崎喜八	三笠書房	1955
山の絵本	尾崎喜八	岩波書店	1993
自註 富士見高原詩集	尾崎喜八	青娥書房	1969
尾崎喜八先生詩碑建立記念誌	尾崎喜八先生詩碑建立会		1980

<p><b>加藤明治</b></p>	<p>1911 年加藤明治は上伊那郡南箕輪村で生まれました。1929 年長野師範学校に入学。翌年川岸尋常小学校の教員として採用されて以来 40 年間教職に就きました。</p> <p>「他人の幸福をうらやむな。</p> <p>このひとつをしっかりとてば、ジタバタせずにくらせる」</p> <p>南信各地の小中学校で勤務しながら児童文学の創作に情熱をそそぎ、1956 年和田登らによって創刊された同人誌「とうげの旗」に参加。さらに宮口しづえらが加わり信州児童文学会が結成されました。加藤明治は会長として多くの後進を育てました。またその童話には地元の子どもたちや村人の姿が生き生きと描かれています。</p> <p>1970 年加藤明治は多くの人々に惜しまれながら 59 歳で亡くなりました。</p> <p>&lt;参考資料&gt;</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>書名</th> <th>／著者名</th> <th>／出版社</th> <th>／出版年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>加藤明治校長の話</td> <td>春日昇治</td> <td>北澤みち子</td> <td>2003</td> </tr> <tr> <td>コナシ原の鈴虫</td> <td>信州児童文学会</td> <td>信濃教育会出版部</td> <td>1973</td> </tr> <tr> <td>水つき学校</td> <td>加藤明治</td> <td>東都書房</td> <td>1965</td> </tr> </tbody> </table>	書名	／著者名	／出版社	／出版年	加藤明治校長の話	春日昇治	北澤みち子	2003	コナシ原の鈴虫	信州児童文学会	信濃教育会出版部	1973	水つき学校	加藤明治	東都書房	1965
書名	／著者名	／出版社	／出版年														
加藤明治校長の話	春日昇治	北澤みち子	2003														
コナシ原の鈴虫	信州児童文学会	信濃教育会出版部	1973														
水つき学校	加藤明治	東都書房	1965														
<p><b>唐木順三</b></p>	<p>唐木順三は 1904 年（明治 37 年）2 月 13 日、上伊那郡宮田村に唐木（タウノキ）家の次男として生まれました。日露戦争開戦の 3 日後のことで、「順三」という名は日本が旅順口でロシアの軍艦 3 隻を撃沈したことに因んでつけられたそうです。唐木の読みは本来「タウノキ」でしたが、順三が中学生の頃から「カラキ」と呼ぶようになったそうです。1917 年（大正 6 年）長野県立松本中学校（現松本深志高校）に入学。一年下に臼井吉見（文芸評論）、古田晃（筑摩書房創業者）がいました。1921 年（大正 10 年）松本高等学校文科甲類に入学。卒業後の 1924 年（大正 13 年）京都大学文学部哲学科に入学、ここで西田幾多郎と生涯を決定づける出会いをします。1927 年（昭和 2 年）京都大学を卒業後、諏訪郡上諏訪高島実業補習学校の教師となり、「信濃毎日新聞」などに文章を載せはじめました。その後満州、千葉、神奈川などで教師を務めながら文筆活動を続け、終戦後の 1946 年（昭和 21 年）明治大学の専任教授に就任しました。戦前・戦中・戦後と、まさに激動の時代を生きた唐木順三は、その後も作家論、評論など数々の作品を刊行しましたが、1980 年（昭和 55 年）、77 歳で肺がんのため永眠しました。翌年には故郷の宮田中学校校庭に「山と語り流に思ひ 風に聞き雲と遊ぶ うるはしき心のしらべ あめつちとともに」の碑が建てられました。</p> <p>&lt;参考資料&gt;</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>書名</th> <th>／著者名</th> <th>／出版社</th> <th>／出版年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>唐木順三全集 全 19 巻</td> <td>唐木順三</td> <td>筑摩書房</td> <td>1981～1982</td> </tr> </tbody> </table>	書名	／著者名	／出版社	／出版年	唐木順三全集 全 19 巻	唐木順三	筑摩書房	1981～1982								
書名	／著者名	／出版社	／出版年														
唐木順三全集 全 19 巻	唐木順三	筑摩書房	1981～1982														

	現代日本文学序説 応仁四話 駿河台文芸 13 号 反時代的思索者	唐木順三 唐木順三  粕谷一希	春陽堂 筑摩書房 駿河台文学会 藤原書店	1932 1966 1993 2005												
<b>清沢冽</b>	<p>清沢冽は明治 23（1890）年、2 月 8 日北穂高村青木花見（現安曇野市）で、村長に推されるほどの裕福な農家の三男として生まれました。</p> <p>小学校卒業後、内村鑑三と親交のあった井口喜源治がひらいていた「研成義塾」でキリスト教を中心とした自由主義教育を受け、「信念」に生きることの大切さを学びました。明治 39（1906）年、16 歳でアメリカに渡り、デパートで雑役や邦字新聞記者として働きながら政治、経済学について学んだとされています。</p> <p>大正 7（1918）年、日本に帰国し、ジャーナリストなどを経て、朝日新聞社に入社しましたが、昭和 4（1929）年、エッセー「甘粕と大杉の対話」を著書に収録したことで右翼の攻撃を受け、その後朝日新聞社を退社し、フリーランスの評論家として再出発します。関東大震災前後には、「信濃太郎」などのペンネームで、震災によるデマや社会主義者などに対して厳しい批判の目を注ぎました。</p> <p>また批判なしに信ずる習癖をつけられてきた日本人に対しても、個人個人が責任ある考えを持って行動しなければいけないと訴えました。</p> <p>生涯にわたり数多くの自由主義と反戦平和を唱える論説や著作を記し、戦時下の記録として貴重な『暗黒日記』を残しました。</p> <p>昭和 20（1945）年、5 月 21 日、55 歳で急性肺炎のため自由と民主主義のために闘った生涯を閉じました。</p> <p>&lt;参考資料&gt;</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>書名</th> <th>／著者名</th> <th>／出版社</th> <th>／出版年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>清沢冽の生涯と自由主義、平和主義</td> <td>山本義彦</td> <td>日本図書センター</td> <td>1998</td> </tr> <tr> <td>清沢冽 胸像建立記念誌</td> <td>清沢冽顕彰会</td> <td>清沢冽顕彰会</td> <td>2001</td> </tr> </tbody> </table>				書名	／著者名	／出版社	／出版年	清沢冽の生涯と自由主義、平和主義	山本義彦	日本図書センター	1998	清沢冽 胸像建立記念誌	清沢冽顕彰会	清沢冽顕彰会	2001
書名	／著者名	／出版社	／出版年													
清沢冽の生涯と自由主義、平和主義	山本義彦	日本図書センター	1998													
清沢冽 胸像建立記念誌	清沢冽顕彰会	清沢冽顕彰会	2001													
<b>國枝史郎</b>	<p>国枝史郎は、1887（明治 20）年 10 月（文献によっては 1888（明治 21）年）、諏訪郡宮川村茅野（現在の茅野市）に生まれました。旧制長野中学校では武道に精錬するバンカラ学生でしたが、学校の教育方針に反抗し放校処分となり、郁文館中学を経て早稲田大学英文科に進みました。在学中に戯曲集『レモンの花の咲く丘へ』を自費出版し、新劇界では『帰れるバーズ』などが上演されました。1914（大正 3）年、大学を中退して大阪朝日新聞社に入社、演劇担当記者となりましたが 1917（大正 6）年に退社し松竹座の座付き作者になりました。1920（大正 9）年、バセドー氏病で健康を害し、松竹座を退いて茅野へ帰り、翌年木曾へ移住し療養を続けました。その翌年には中津川に移り、大学の同級生に勧められ『講談雑誌』</p>															

に、代表作となる長編伝奇『蔦葛木曾棧（つたかづら きそのかけはし）』の連載を開始します。体調の回復とともに“宮川茅野雄”、“鎌倉参朗”、“奈良うねめ”他、多数の筆名を駆使して『八ヶ嶽の魔神』、『神州纒纒城（しんしゅうこうけつじょう）』、『砂漠の古都』、『暁の鐘は西北より』など伝奇、探偵、現代物の小説や随筆を精力的に執筆しました。晩年は、ダンス教室や喫茶店を経営して創作から遠ざかり、1943（昭和 18）年東京で永眠しました。お墓は、故郷茅野市の宗湖寺にあります。

<参考資料>

書名	／著者名	／出版社	／出版年
国枝史郎伝奇全集 全6巻補巻1	国枝史郎	未知谷	1992
国枝史郎伝奇文庫	国枝史郎	講談社	1976
国枝史郎探偵小説全集	国枝史郎	作品社	2005
国枝史郎伝奇短篇小説集	国枝史郎	作品社	2006
国枝史郎伝奇浪漫小説集成	国枝史郎	作品社	2007
国枝史郎ベスト・セレクション	国枝史郎	学研	2006
長野県歴史人物大事典	神津良子／編	郷土出版社	1989

**窪田空穂**

窪田空穂は、1877年東筑摩郡和田村（現松本市）に生まれた、歌人・国文学者です。本名は通治。松本尋常中学校（現松本深志高校）、早稲田大学を卒業後、新聞記者を経て早稲田大学教授を長年勤めました。

23歳の代用教員時代に、新体詩から短歌に入りはじめた空穂。そのきっかけは、同じく県立図書館のゆかり作家に挙げられている、太田水穂との交友からでした。与謝野夫妻の『明星』に作品を投稿していましたが、詩歌集「まひる野」などの発表を経て、後に『国民文学』を刊行。家族愛をうたう人生派歌人として、滋味あふれる歌風を確立しています。

こんな空穂ですが、実は新聞記者時代に、大変興味深い仕事を行なっています。それはなんと人生相談！満39歳の時に、読売新聞婦人部の記者として、婦人附録面掲載の「身の上相談」を執筆していたのです。211事例に及ぶ回答は、今年2月に発行された『窪田空穂の身の上相談』に収録されています。人生にお悩みの方は、参考にされてはいかがでしょうか？

<参考資料>

書名	／著者	／出版社	／出版年
窪田空穂の身の上相談	臼井和恵	角川書店	2006年
近代詩人・歌人自筆原稿集	保昌正夫ほか	東京堂	2002年
窪田空穂全歌集	窪田章一郎ほか	短歌新聞社	1981年



	窪田空穂の短歌 窪田章一郎 短歌新聞社 1996年 ☆窪田空穂記念館☆ 松本市和田 1715-1 TEL : 0263-48-3440																				
<b>久米正雄</b>	<p>正雄は 1891（明治 24）年上田市で生まれました。幼いころに父を亡くしたため、母の故郷である福島県で育ちました。福島県立安積中学校（現安積高等学校）から東京帝国大学（現東京大学）へと進み、在学中に成瀬正一、松岡譲らと第三次『新思潮』を創刊。1915（大正 4）年に夏目漱石の門人となり、翌年に芥川龍之介、菊池寛らと第四次『新思潮』を創刊し多くの作品を発表しました。1916（大正 5）年に漱石が亡くなったあと、漱石の長女筆子との結婚を望みますが紆余曲折の末破談となり、後に筆子は松岡譲と結婚しました。このころから正雄は失恋の苦悩を綴ったものや、小説を数多く発表し好評を博します。しかし通俗小説の大家となっても芸術小説への憧れが強く、評論『私小説と心境小説』で初めて「純文学」という語を用い「ゾラもドストエフスキーも所詮は作り事で、私小説こそが真の純文学だ」と論じ、日本文学の趨勢を決めました。また自らの文学を「微笑」と「苦笑」を合わせて作った造語から「微苦笑芸術」とも呼びました。関東大震災にみまわれた際、長谷寺へ避難したことが縁となり、正雄は 1925（大正 14）年から鎌倉に居を構えました。そして 1945（昭和 20）年、鎌倉文士の蔵書を基に川端康成らと貸本屋“鎌倉文庫”を創設。戦後、文藝出版社となった際は社長を務め、文藝雑誌『人間』や大衆小説誌『文藝往来』などを創刊しました。また鎌倉ペンクラブ初代会長としても活躍しました。1952（昭和 27）年、正雄は脳溢血のため 61 歳で急逝しました。忌日は俳号の三汀（さんてい）から三汀忌、または微苦笑忌と呼ばれています。</p> <p>&lt;参考資料&gt;</p> <table border="1" data-bbox="371 1361 1310 1585"> <thead> <tr> <th>書名</th> <th>／著者名</th> <th>／出版社</th> <th>／出版年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>漱石先生の死</td> <td>久米正雄</td> <td>春陽堂</td> <td>1921</td> </tr> <tr> <td>微苦笑随筆</td> <td>久米正雄</td> <td>文芸春秋新社</td> <td>1953</td> </tr> <tr> <td>近代を築いたひとびと 3</td> <td>坂本令太郎</td> <td>信濃路</td> <td>1975</td> </tr> <tr> <td>久米正雄全集全 13 巻</td> <td>久米正雄</td> <td>本の友社</td> <td>1993</td> </tr> </tbody> </table>	書名	／著者名	／出版社	／出版年	漱石先生の死	久米正雄	春陽堂	1921	微苦笑随筆	久米正雄	文芸春秋新社	1953	近代を築いたひとびと 3	坂本令太郎	信濃路	1975	久米正雄全集全 13 巻	久米正雄	本の友社	1993
書名	／著者名	／出版社	／出版年																		
漱石先生の死	久米正雄	春陽堂	1921																		
微苦笑随筆	久米正雄	文芸春秋新社	1953																		
近代を築いたひとびと 3	坂本令太郎	信濃路	1975																		
久米正雄全集全 13 巻	久米正雄	本の友社	1993																		
<b>小林一茶</b>	<p>一茶は、1763 年水内郡柏原村（現上水内郡信濃町）の農家の長男として生まれました。幼名は弥太郎、号は俳諧寺一茶。</p> <p>3 歳の時に母と死別し、8 歳で迎えた継母との間がうまくいかず 15 歳で江戸奉公に出されました。奉公生活の間に俳諧という自己表現の道を見出し、葛飾派という俳諧グループの一員となりました。29 歳でいったん帰郷し、翌年 30 歳から 36 歳まで近畿、四国、九州、中国各地を行脚し、『旅拾遺』『さらば笠』の二著を刊行しました。39 歳の時に父の死病を看病し、その体験を『父の終焉日記』にまとめています。この後、10 年以上にわたって継母、弟との財産争いが続きました。</p>																				

1812年、故郷に帰住し財産問題にもけりをつけ、52歳で妻の菊を迎え三男一女をもうけましたが、皆早死にし長女サトを失った悲しみは57歳の時の俳文集『おらが春』に結晶しています。

65歳の時に柏原の大火に遭って居宅を焼失、焼け残りの土蔵の中で亡くなりました。

「我ときて遊べや親のない雀」「瘦蛙まけるな一茶是にあり」「やれ打つな蠅が手をすり足をする」「雀の子そこのけそこのけお馬が通る」

これらの句はあまりにも有名です。一茶は自然や人間、子供や動植物に対して飾らずに語りかけてくる独特の句風や文章を生み出し、二万句にもおよぶ俳句を残しています。

<参考資料>

書名	/著者	/出版社	/出版年
一茶集 古典俳文学体系	小林一茶	集英社	1970
一茶全集第一巻～八巻、別冊	小林一茶	信濃毎日新聞社	1976～1980
一茶の研究	大場俊助	島津書房	1993
一茶入門	黄色瑞華	高文堂出版社	2001
一茶—その生涯と文学	小林計一郎	信濃毎日新聞社	2002

## 齋藤史

齋藤史は戦後の信州で活動した現代短歌を代表する女性歌人です。1909年（明治43年）、東京四谷に生まれました。父は軍人で佐々木信綱門下の歌人として知られた齋藤瀏（りゅう）氏。1936年（昭和11年）の「二・二六事件」で、父の瀏氏のもとによく遊びに来た青年将校が決起し、反乱の罪により銃殺刑となり、父も反乱ほう助の疑いを持たれ禁固刑を受けます。その事件が齋藤史の作品に深い影響を与えました。昭和初期から作品を発表し、1940年（昭和15年）の第一歌集『魚歌』は詩人の萩原朔太郎からも高く評価され、現代短歌の先駆として注目されました。1945年（昭和20年）長野市に疎開。住宅難や食糧難、父の死、母と夫の介護などを経験しつつも、多くの秀歌を生みました。長野県内では、職場の短歌グループの指導などに取り組み、各地で講演活動などを続け、信毎歌壇の選者を三十年以上務めるなど、郷土の短歌活動の発展に貢献しました。歌誌『原型』の主宰者でもあります。代表的な作品に、『ひたくれなみ』（遼空賞）、『涉りかゆかむ』（読売文学賞）、『秋天瑠璃』（齋藤茂吉短歌文学賞、詩歌文学館賞）、『過ぎて行く歌』（信濃毎日新聞懸賞小説一席入選）などがあり、『齋藤史全歌集』と全業績に対し1997年（平成9年）に現代歌人協会から第20回現代短歌大賞を贈られました。2002年（平成14年）4月26日、96歳で亡くなりました。

### <参考資料>

書名	/著者名	/出版社	/出版年
『過ぎて行く歌』	齋藤史著	河出書房新社	2001
『不死鳥の歌人齋藤史』	山名康郎著	東京四季出版	2004
『齋藤史全歌集』	齋藤史ほか著	大和書房	1997
『写真集信州の顔』	坂口清一著	郷土出版社	1987
『信濃毎日新聞 2002. 4. 26 夕刊 p1, p7』			『朝日新聞 2002. 4. 26 夕刊 p23』

## 斎藤瀏

「斎藤瀏」の名前に見覚えがない方も、「斎藤史」の名前なら、郷土の歌人としてご存知の方が多いのではないのでしょうか。今回ご紹介する「斎藤瀏」は、「斎藤史」の父であり、軍人、歌人として、明治から昭和の初めにかけて、波乱の人生を送りました。斎藤瀏は、明治 12（1879）年 4 月 16 日に長野県北安曇郡七貴村（現在の安曇野市明科）の旧松本藩士三宅政明の四男として生まれ、明治 29 年、松本中学（現松本深志高校）2 年の時に、漢学者齋藤順（星軒）の養子になりました。その後、陸軍幼年学校、士官学校を経て陸軍大学校を卒業、明治 37 年には日露戦争に従軍しました。戦争中に短歌に興味を持ち、帰還後、佐佐木信綱の門に入り、長く『心の花』の異色歌人として知られました。大正 10 年には第一歌集『曠野（あらの）』を、ついで昭和 4 年には第二歌集『霧花（きばな）』を刊行、昭和 11 年には第三歌集『波濤』の刊行を予定していましたが、その年、二・二六事件に連座、反乱ほう助罪で下獄、昭和 13 年 9 月に仮出所となるまでの 2 年 4 ヶ月を独房の中で過ごしました。昭和 14 年には『短歌人』を創刊・主宰し、その後時局の動きとあいまって歌壇における国家主義的傾向の推進者となりました。戦争末期に郷里長野県（池田町）に疎開、戦後も長野県に留まりました。晩年は娘、史夫婦と同居し、昭和 27 年には第五歌集『慟哭』を自費出版しましたが、昭和 28 年 7 月 5 日に 74 歳で亡くなりました。斎藤瀏が疎開した北安曇郡池田町の洪田見八幡神社境内に、瀏と史の親子歌碑があり、次の歌が刻まれています。「黒染のそれとまがへど牡丹花のむらさきにほふおぼろなる月 瀏」「やまぐにのはるの遠さよゆふそらは燃えておもひをふかむるらしも 史」

### <参考資料>

書名	／著者名	／出版社	／出版年
昭和維新の朝	工藤美代子	日本経済新聞社	2008
現代短歌全集第 4 卷（第一歌集『曠野』収録）		筑摩書房	1981
近代文学文学研究叢書 74		昭和女子大学近代文化研究所	1998
短歌人 第 15 卷第 9 号		短歌人会	1953

## 酒井朝彦

朝彦は、明治 27(1894) 年下伊那郡竜丘村(現飯田市) に生まれました。本籍地は岐阜県中津川町(現中津川市) ですが、明治 33 (1900) 年父の死に伴い、木曾須原宿の古刹定勝寺にあずけられ少年時代を送ったため、木曾が事実上の故郷となりました。そうしたこともあり、木曾を舞台に少年少女の生活を題材に郷愁をおびた『ゆきむすめ』などの作品を書いています。

朝彦は早稲田大学英文科を卒業し、児童文学を志しました。朝彦の作品には『天に昇った蛍』『青い光の国』『月夜を行く川水』などがあり、大正 13 (1924) 年には、日本で最初の児童文学同人誌『童話時代』を創刊し、『木馬の夢』『春のラッパ』などしっとりとした情感の童話を書きました。また、朝彦は木曾と信濃を愛し、木曾の方言を巧みに駆使した『雪おんば』をはじめ、多くの郷土童話も出しています。朝彦の童話に感銘を受け児童文学に進んだ人も多いといます。

昭和 31 年からは 5 年間にわたり、信濃毎日新聞で「信州こども歳時記」として、月一編ずつ朝彦の作品が発表されました。その後昭和 36(1961) 年、68 歳のときに未来社から出版した『新信濃むかし話』が第 5 回未明賞を受賞しています。

また、自身で創作するだけでなく、『フランダースの犬』や『ハイジ』などの翻訳作品も発表しました。

朝彦は 50 年近い歳月を児童文学に専心し、昭和 44 (1969) 年に急性胃潰瘍のため 76 歳の生涯を閉じました。

### <参考資料>

書名	／ 著者名	／ 出版社	／ 出版年
酒井朝彦集	酒井朝彦	湯川弘文社	1938
民話の森・童話の王国	和田登	オフィスエム	2002
酒井朝彦文庫目録	中津川市立図書館編	中津川市立図書館	1981

## 佐久間象山

象山は幕末 1811（文化 8）年 2 月、信州松代藩十万石の城下町、松代の浦町（現長野市松代町有楽町）に生まれました。幼名は啓之助（けいのすけ）といます。啓之助の父、一学（いちがく）は五両五人扶持（ごりょうごにんぶち）という身分の低い侍でした。しかし、ト伝流の達人で道場を開いて多くの門人に剣術を教えたり、和漢の学問にも造詣が深く、書にもすぐれていたため、神溪先生と呼ばれて人々に大変尊敬されていました。特に儒学の大家で、仁・義・礼を大事にし、啓之助にも儒学を厳しく教えました。啓之助は幼いころから神童と言われるほど賢かったとされています。啓之助が 13 歳の春、真田幸貫（ゆきつら）が八代藩主として松代に入りました。幸貫は江戸に育ち、政治はもちろん文武に優れた人物で、将来の有能な人物を育てるため子どもたちの教育には特に熱心でした。啓之助が 15 歳で元服した際、幸貫は啓之助を城に呼びました。15 歳にして堂々と自分の考えを述べる啓之助の賢さを見抜いた幸貫は、啓之助を松代藩になくてはならない人物に育てようと決めました。23 歳で江戸遊学の許しを与えられた啓之助は、3 年の後松代に帰り「象山」という号を用い、28 歳のとき名前を「修理（しゅり）」と改めました。象山 31 歳のとき、幸貫が幕府の老中になりました。象山は、外国の文化や学問、海軍などの様子を調べる相談役となり、今まで考えたこともなかった西洋の勉強を始めることになりました。特に海防には蘭学が絶対に必要な学問でした。象山は黒川良安から熱心にオランダ語を習い、わずか 2 ヶ月ほどで文法を覚えたといわれています。オランダ語を習得した象山は『ショーメールの百科全書』を手がかりに、ガラス製品、さまざまな薬、地震予知器、望遠鏡、種痘、電信機、カメラ、電気治療機を研究して実際に作ったり、豚を飼って食べるなどの実験をしました。鎖国で外国の文化から遠ざけられていた日本人に、西洋の文明を具体的に作って見せたのです。1854（安政元）年 44 歳のとき、象山は吉田松陰の密航に関わったとして投獄されます。その後松代に送られ、約 9 年間蟄居（ちつきよ）生活を送ります。しかし、1862（文久 2）年、土佐や長州の藩主たちが象山の罪を許してもらおう運動を起こし、ようやく長い日陰の生活から開放されることになりました。1864（元治元）年、幕府に京都へのぼるよう命じられた象山は、約 3 ヶ月の間三条木屋町に家を借り、これまでの不遇な生活を取り戻すかのように自由に過ごしました。7 月 11 日、山階宮に馬術を見せるために出かけ、帰宅した夕方 5 時頃、二人の武士に切りつけられて体に 13 ヶ所の傷を受け馬から落ち、そのまま息をひきとりました。象山 54 歳のときのことでした。

### <参考資料>

書名	／著者名	／出版社	／出版年
佐久間象山	長野市校長会	長野市教育委員会	1991
佐久間象山	古川薫	小峰書店	2006
佐久間象山の世界	長野市ほか	松代文化施設等管理事務所	2004

**四賀光子**

光子は明治 18（1885）年長野町（現長野市）で生まれました。本名は太田みつです。長野県師範学校卒業後 2 年間教師として勤め、この頃太田水穂と出会い「この花会」に参加して作歌を始めました。その後東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）へ進み、卒業とともに水穂と結婚します。女学校の教師をするかわら、若山牧水主宰の『創作』に歌を発表していましたが、大正 4（1915）年水穂が『潮音』を創刊すると同人となり、歌人として活躍しました。又、編集、運営にも力を尽くしました。養嗣子に兄・嘉曾次の三男・兵三郎を迎えました。彼は後に歌人で漢文学者の太田青丘となります。昭和 9（1934）年、光子は夫と共に鎌倉の扇ガ谷に山荘を設け、杳々山荘と名づけました。初めは時折の静養の場としていましたが、昭和 14（1939）年に居を移しました。以後昭和 51（1976）年に 91 歳で亡くなるまで住み、鎌倉に関する歌も数多く遺しています。 流らふる 大悲の海によばふこゑ時をへだててなほたしかなり 鎌倉市東慶寺境内 歌碑より昭和 30（1955）年に水穂が亡くなると、子息の青丘とともに『潮音』の主軸となり、昭和 32（1957）から 8 年間宮中歌会始の選者も務めました。歌集には『藤の実』『朝月』などがあります。

## &lt;参考資料&gt;

書名	／著者名	／出版社	／出版年
四賀光子全歌集	四賀光子	春秋社	1961
四賀光子の人と歌	西村真一	短歌新聞社	2002
随筆行く心帰る心	四賀光子	春秋社	1966
和歌作者の為に	四賀光子	木鐸社	1930
太田水穂研究	太田青丘	角川書店	1967

## 渋沢孝輔

詩人の渋沢孝輔は1930年、小県郡長村（旧真田町、現上田市）に生まれました。旧制中学校を卒業する頃には詩の習作を始めていたという彼は、1948年に東京外事専門学校（現東京外国語大学）フランス語科に入学後、ランボーに熱中、萩原朔太郎、中原中也、富永太郎、立原道造などの作品に親しみました。同校を卒業後、新制の東京外国語大学3年に編入学し、ボードレール論を研究対象とし、1953年卒業しました。後に東京大学大学院（フランス語フランス文学）に進学してからは、鈴木信太郎に師事し、ランボーの研究を続け、1956年「ランボー論」を修士論文として書き上げました。

同人誌「未成年」「XXX」に詩を発表して注目され、1958年に藤原定、山室静、田中冬二らの同人誌「花粉」に参加。1959年に第一詩集「場面」を、1966年に詩集「不意の微風」を刊行しました。ランボーやボードレール研究によってつちかわれた強固な知性と批判性に裏打ちされた硬質のイメージによる独特の抒情の世界は多くの詩人に注目されることになり、1968年、草野心平を中心とする雑誌「歷程」同人となります。以後、歷程賞受賞「われアルカディアにもあり」、高見順賞「廻廊」、萩原朔太郎賞「行き方知れず抄」など多くの詩集を発表しました。明治大学教授も務め、ヨーロッパの詩文学だけでなく、日本の近代・現代の詩人についても広い関心を示し、すぐれた詩の世界を探求していましたが、1998年、下咽頭がんのため、67歳で死去しました。

### <参考資料>

書名	／著者	／出版社	／出版年
渋沢孝輔詩集	渋沢孝輔	小沢書店	1980年
詩のヴィジョン	渋沢孝輔	思潮社	1984年
啼鳥四季	渋沢孝輔	思潮社	1991年
行き方知れず抄	渋沢孝輔	思潮社	1997年
冬のカーニバル	渋沢孝輔	思潮社	1999年



## 島木赤彦

島木赤彦は1876年諏訪郡上諏訪村（現諏訪市元町）で生まれました。生家・塚原家は貧しく母、弟、兄を相次いで亡くしました。1894年長野師範に入学。「文庫」「青年文」などへの投書家として活躍しました。教員だった父は、若い赤彦に教育者としての基礎を厳しく説いたといわれています。1898年赤彦は23歳で久保田家の養子となり妻をむかえました。「自己の歌をなすは、全身の集中から出ねばなりません。」1908年雑誌「アララギ」が刊行され、1914年その編集を伊藤左千夫から引き継いだころから、赤彦は歌壇の主流へと押し出されていきます。1920年に出版された歌集「氷魚」は歌人としての赤彦の評価を決定的なものにしました。教員として各校を歴任した後、雑誌「信濃教育」の編集主任をつとめ、万葉会を結成して万葉集の講義を各地でするなど教育者としても活躍しました。長野・東京を往復する生活の中で体調を崩した赤彦は、1926年惜しまれながら49歳の生涯を閉じました。「魂はいつれの空へ行くならん我に用なきことを思ひ居り」歌人として、教育者として一本の道を歩み続けた島木赤彦。そのアララギ精神、“鍛錬道”の精神は、信州教育の根幹として今も生きつづけています。

### <参考資料>

書名	／著者	／出版社	／出版年
信州人物風土記5 島木赤彦	宮坂勝彦	銀河書房	1986
柿蔭集	島木赤彦	郷土出版社	1991
歌人・教育者島木赤彦	徳永文一	溪声出版	2003
父赤彦の俳 上・下	久保田夏樹	信濃毎日新聞社	1996
赤彦全集 全10巻	島木赤彦	岩波書店	1969～1970

## 島崎藤村

藤村は、1872年筑摩県馬籠村で代々、本陣や庄屋をつとめる名家の四男として生まれました。本名は春樹。

父の正樹は『夜明け前』の主人公青山半蔵のモデルと言われており、藤村に与えた文学的な影響は多大であったと言われています。

大学卒業後、教師を勤める傍ら、『若菜集』・『一葉舟』等で浪漫的叙情詩人として文筆活動をスタートしました。

その後、1899年木村熊二の招きにより小諸義塾の教師として小諸町（小諸市）に赴任。小諸での6年間に『破戒』の構想を練り、上京後の1906年自費出版により『破戒』を発表。続く『春』・『家』などの作品で自然主義文学の先駆となり、1935年には、長編『夜明け前』を発表、日本近代文学に大きな影響を与えました。

また、いくつもの長編を発表する一方で、『ふるさと』、『をさなものがたり』等の童話集の出版も行った他、鈴木三重吉の「赤い鳥」の創刊を助けたり、有島生馬の「金の船」の監修者として名を連ねるなど児童向雑誌の発行にも尽力しました。1943年大磯の自宅で『東方の門』を執筆中に脳溢血のため永眠。

	<p>&lt;参考資料&gt;</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>書名</th> <th>／著者</th> <th>／出版社</th> <th>／出版年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>一葉舟</td> <td>島崎藤村</td> <td>春陽堂</td> <td>1898. 6</td> </tr> <tr> <td>新片町より</td> <td>島崎藤村</td> <td>佐久良書房</td> <td>1909. 9</td> </tr> <tr> <td>小説藤村集</td> <td>島崎藤村</td> <td>博文館</td> <td>1909. 12</td> </tr> <tr> <td>島崎藤村研究 3号～30号</td> <td>島崎藤村学会</td> <td>双文社出版</td> <td>1978～2002</td> </tr> <tr> <td>父藤村と私たち</td> <td>島崎蒔助</td> <td>海口書店</td> <td>1947. 12</td> </tr> <tr> <td>落穂 藤村の思い出</td> <td>島崎静子</td> <td>明治書院</td> <td>1972</td> </tr> <tr> <td>藤村と飯山</td> <td>三井文彦</td> <td>真宗寺</td> <td>1988. 12</td> </tr> <tr> <td>島崎藤村と小諸義塾</td> <td>並木張</td> <td>櫟</td> <td>1996. 4</td> </tr> </tbody> </table>	書名	／著者	／出版社	／出版年	一葉舟	島崎藤村	春陽堂	1898. 6	新片町より	島崎藤村	佐久良書房	1909. 9	小説藤村集	島崎藤村	博文館	1909. 12	島崎藤村研究 3号～30号	島崎藤村学会	双文社出版	1978～2002	父藤村と私たち	島崎蒔助	海口書店	1947. 12	落穂 藤村の思い出	島崎静子	明治書院	1972	藤村と飯山	三井文彦	真宗寺	1988. 12	島崎藤村と小諸義塾	並木張	櫟	1996. 4
書名	／著者	／出版社	／出版年																																		
一葉舟	島崎藤村	春陽堂	1898. 6																																		
新片町より	島崎藤村	佐久良書房	1909. 9																																		
小説藤村集	島崎藤村	博文館	1909. 12																																		
島崎藤村研究 3号～30号	島崎藤村学会	双文社出版	1978～2002																																		
父藤村と私たち	島崎蒔助	海口書店	1947. 12																																		
落穂 藤村の思い出	島崎静子	明治書院	1972																																		
藤村と飯山	三井文彦	真宗寺	1988. 12																																		
島崎藤村と小諸義塾	並木張	櫟	1996. 4																																		
代田昇	<p>1924年、下伊那郡河野村（現豊丘村）に生まれました。「日本子どもの本研究会」の創設者の中心人物であり、子どもたちに読書のよろこびを知ってもらおうと、読書運動を強力に推進してきました。また、学校教育の中で、読書をどのように位置づけるかという読書教育についての考え方を問題提起した理論家でもありました。「聞く読書から読む読書へ」を皮切りに、「子どもの読書を見なおそう」など数々の著作・論文を執筆しました。また、子ども向けに絵本や児童書も数多く執筆しました。ふるさとの信州を題材にした絵本「てんりゅう」、「しなののぶんご」や、戦争で深い思い出があったとされる沖縄を舞台にした絵本「あんぱるぬゆんた」や、新解釈絵本の「ももたろう」などたくさん作品があります。日本全国で活躍された代田さんは2000年に肝臓ガンのため逝去されますが、その前年まで、最も愛した場所「戸隠」を訪れ、キノコ狩りなどで楽しんだということです。幼少の頃、山を駆けめぐった思い出と風景を、戸隠に求めていたのではないのでしょうか。</p> <p>&lt;参考資料&gt;</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>書名</th> <th>／著者</th> <th>／出版社</th> <th>／出版年読</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>書運動とともに</td> <td>代田昇遺稿集編集委員会</td> <td>ポプラ社</td> <td>2002</td> </tr> <tr> <td>子どもの読書を見なおそう</td> <td>代田 昇</td> <td>岩崎書店</td> <td>1972</td> </tr> <tr> <td>子どもの文化と読書活動</td> <td>代田 昇</td> <td>岩崎書店</td> <td>1987</td> </tr> <tr> <td>てんりゅう</td> <td>しろたのぼる</td> <td>岩崎書店</td> <td>1971</td> </tr> <tr> <td>あんぱるぬゆんた</td> <td>代田 昇</td> <td>銀河社</td> <td>1976</td> </tr> </tbody> </table>	書名	／著者	／出版社	／出版年読	書運動とともに	代田昇遺稿集編集委員会	ポプラ社	2002	子どもの読書を見なおそう	代田 昇	岩崎書店	1972	子どもの文化と読書活動	代田 昇	岩崎書店	1987	てんりゅう	しろたのぼる	岩崎書店	1971	あんぱるぬゆんた	代田 昇	銀河社	1976												
書名	／著者	／出版社	／出版年読																																		
書運動とともに	代田昇遺稿集編集委員会	ポプラ社	2002																																		
子どもの読書を見なおそう	代田 昇	岩崎書店	1972																																		
子どもの文化と読書活動	代田 昇	岩崎書店	1987																																		
てんりゅう	しろたのぼる	岩崎書店	1971																																		
あんぱるぬゆんた	代田 昇	銀河社	1976																																		

## 高野辰之

高野辰之は 1876 年（明治 9 年）4 月 13 日長野県下水内郡永田村大字永江（現中野市永江）に、父高野仲右衛門、母いしの長男として生まれました。

父仲右衛門は小布施の高井鴻山に教えを受けた教養豊かで心の広い人物で、辰之はこの父の下で自然に学問の雰囲気に取り込まれながら成長していきました。

飯山高等小学校卒業後は母校永江学校の代用教員として勤務し、1897 年（明治 30 年）に長野師範学校を卒業し、教職につきます。しかし 1902 年（明治 35 年）、辰之が 26 歳のとき、上田万年博士のもとで研究するために上京、国語・国文学、邦楽の研究に没頭します。

1904 年（明治 37 年）には文部省属官となり、その後、文部省の小学校唱歌教科書編纂委員としてわが国最初の「尋常小学唱歌」の作詞にあたり、1911 年に「日の丸の旗」、「紅葉」、1912 年に「春が来た」、「春の小川」、1914 年に「故郷」、「朧月夜」などの国民的な歌謡を世に送り出しました。また、国文学者としても『近松門左衛門』『日本歌謡史』に代表される多くの著作を残しています。

晩年は故郷に近い野沢温泉に移り住み、71 歳で亡くなるまで斑尾山など北信五岳を

眺め、村の人びとや家族に囲まれ幸せな晩年を過ごしたといわれています。

### <参考資料>

書名	/著者名	/出版社	/出版年
『ふるさと草子 高野辰之と野沢温泉』	斑山文庫収集委員会	銀河書房	1989
『定本 高野辰之-その生涯と全業績』	芳賀綏	郷土出版社	2001

## 鷹野つぎ

鷹野つぎは、1890年静岡県浜名郡浜松町の商家の次女として生まれました。女学校卒業後、浜松町の「文学同好会」に入会し、この会の中心となっていた新聞記者の鷹野弥三郎（南佐久郡松原湖畔生まれ）と出会い、周囲の反対を押切って1909年結婚。つぎの文学活動は、河井醉茗の「女史文壇」への投稿から始まりますが、本格的な活動を始めたのは、夫の紹介で島崎藤村に出会った1920年以降からになります。藤村は1922年に「処女地」を創刊しましたが、その中で最も活躍し、藤村の期待に応えたのが鷹野つぎでした。彼女の小説は、自然主義的な方法で、家庭の内部を描いた短編が多く、藤村の影響を強く受けているのがうかがえます。1922年最初の小説集「悲しき配分」を出版しますが、その巻頭に藤村は異例とも言える序文を寄せていることから彼女を高く評価していたことが分かります。また、平塚らいてう、高群逸枝、奥むめおら女性解放運動家との交流も深く、1940年随筆集「幽明記」、1942年「女性の首途」などを発表しました。彼女の人生は、夫の失業による貧困の中、8人の子どもの内6人を病気で失い、自身も結核の発病、治療と不幸が続きますが、このような状況の中で、小説・評論・随筆を書き続け11冊の著書を発表しました。信州との繋がりは、夫の生まれ故郷だったということだけでなく、複数の作品の中で、信州を「第二の故郷」と記述するなど愛着は深かったようです。1943年中野区沼袋の自宅で結核のため永眠（54歳）。墓所は半年後に亡くなった夫や子どもと共に松原湖畔にあります。

### <参考資料>

書名	／著者	／出版社	／出版年
ある道化役	鷹野つぎ	紅玉堂書店	1924
春夏秋冬	鷹野つぎ	山根書房	1944
鷹野つぎ著作集1～4	鷹野つぎ	谷島屋書店	1979
鷹野つぎ	東栄蔵	銀河書房	1983

## 武井武雄

武井武雄は1894（明治27）年6月25日、諏訪郡中洲村（現諏訪市）に生まれ、その後旧制諏訪中学校（現諏訪清陵高校）を経て1914（大正3）年東京美術学校（現東京芸術大学）洋画科に入学しました。卒業後、絵雑誌『子供之友』、『日本幼年』、『コドモノクニ』などに子ども向きの絵を描き始め、その後、童話の創作もしました。

1923（大正12）年には、処女童話集『お凞の卵』を出版、その翌年には東京銀座の資生堂で「武井武雄童画展」を開催しました。このとき初めて子どものための絵に、「童画」という呼称が用いられました。

1927（昭和2）年には初山滋、川上四郎、村山知義らと「日本童画家協会」を結成し、その後も数々の作品を発表しました。また郷土玩具や郷土菓子の収集も行い、デパートで自案新作の玩具・小手工芸品展を開催したり、関係書籍の出版なども行いました。

1945（昭和20）年には戦災で居宅を焼失し、いっさいの作品と1万点にも達していた蒐集品を失うという不幸にも見舞われましたが、その後も様々な作品を発表し続け、紫綬褒章、勲四等旭日小綬賞、紺綬褒章を受章されました。又1978（昭和53）年には郷里岡谷市の特別功労者として表彰されました。

1983（昭和58）年1月、90歳の年に刊本作品第137冊となる『ABC夜話』を開頒しましたが、翌2月7日、心筋梗塞のため急逝しました。

岡谷市にある「イルフ童画館」には武井武雄の作品が数多く収蔵されております。お休みの日にお出かけになってみてはいかがでしょうか。

### <参考資料等>

書名	／著者名	／出版社	／出版年
武井武雄の世界 青の魔法	武井武雄	弥生書房	1992
戦中・戦後気促画帳	武井武雄	筑摩書房	2005
武井武雄・メルヘンの世界	武井武雄	諏訪文化社	1984
武井武雄作品集 童画	日本童画美術館（イルフ童画館）編		1998

※その他多数作品集あり  
イルフ童画館ホームページ

## 太宰春台

太宰春台は、延宝八（1680）年、飯田藩士太宰言辰の二男として、飯田上荒町（現在の中央通り）で生まれました。幼名は千之助、後に純と改め、字は徳夫、通り名を弥右衛門と呼びました。飯田の地で、教育熱心な両親から文武両道の教えを受けますが、元禄元（1688）年、父親が、ある事件が原因で藩主の機嫌を損ね、飯田藩を追放されてしまい、一家で江戸へ移住することになります。彼は和歌を、後に漢詩を志し、また出石（いずし）藩主に仕えながら中野き謙（きけん。「き」は手偏に爲）の門下で朱子学を学びますが、母の死を機に、喪に服すとしてそれ以前から願っていた致仕（やめること）を強行したところ、これが一方的なものとして出石藩主の怒りを買ひ、十年の禁錮の処分を受けることになります。期間中は他家への仕官も禁じられるという厳しい処分でしたが、京都を中心に放浪しながらの修行の期間となり、春台を名のるのはこの頃です。禁錮が解けて江戸に帰ってからは、荻生徂徠の門下に入り、後に小石川に紫芝園という私塾で多くの門人を集めるとともに、徂徠の経学（儒学）・経世学（経世済民の学）を継承・発展した研究活動は名声を高めました。ことに困窮する幕藩財政を目の当たりにして、『経済学拾遺』により行った経済振興策の具体的提言は、日本で初めて重商主義的経済思想に達していたとされています。『経済録』『経済録拾遺』など、「経済」の名を用いて「経世済民」の専門書を発行したのも、春台が日本で初めてであり、古今の社会経済現象を克明に分析して展開した経済論により、日本の経済学の鼻祖として評価されています。また、博学で天文律暦・算数・書法・医学などにも通じ、舞や横笛の名手としても知られ、音楽評論も行っています。権勢にこびず、時に自負に過ぎる彼の姿勢は、仕官の機会を自ら逃すことにもなり、自身の研究と門人の教育に捧げた生涯を通じて、経済的には恵まれませんでした。多くの著書を残し、延享四（1747）年没。門人達により谷中の天眼寺に葬られ、碑石には「春台太宰先生之墓」と刻まれています。先に記した江戸移住以来、飯田の地を踏むことはありませんでしたが、県歌「信濃の国」で郷土四傑の一人として歌われ、その名が親しまれているのはご存知のとおりです。

### <参考資料>

書名	/著者名	/出版社	/出版年
春台先生紫芝園稿	太宰春台	ぺりかん社	1986
太宰春台	武部善人	吉川弘文館	1997
太宰春台・服部南郭	田尻祐一郎	明德出版社	1985

## 中山晋平

中山晋平は1887年新野村（現中野市新野）に生まれました。6歳で父を亡くしましたが、新野の美しい自然の中でのびやかに成長しました。小学校にベビーオルガンが置かれたことがきっかけで音楽に興味を持ち、神社の祭りで笛役を務めるなどその才能を発揮しました。

高等小学校卒業後代用教員になりましたが、学問への志を絶ちがたく上京。1905年島村抱月のもとで書生をしながら東京音楽大学（現東京芸術大学）へ進学します。当時抱月は芸術座を結成し、新しい演劇の道を切り拓こうとしていました。1914年晋平は劇中歌「カチューシャの唄」を作曲。これが大ヒットし、作曲家として華々しくデビューしました。

晋平の歌は日本独特の旋律を生かしたメロディーが特徴で、大衆に愛されました。その後北原白秋、野口雨情、西条八十ら詩人と共に童謡運動に参加し「しゃぼん玉」「あの町この町」など子どものための童謡を800曲余作りました。

いのち短し恋せよ乙女 紅き唇あせぬ間に

熱き血潮の冷えぬ間に 明日の月日はないものを

黒澤明監督の映画「生きる」でガンを宣告された主人公が歌う「ゴンドラの唄」に感動を隠せなかった晋平は、映画を見てから1ヵ月後、胆のう炎で65歳の生涯を閉じました。

中山晋平の音楽と気さくで謙虚な生き方は、今も多くの人々に愛されています。

### <参考資料>

書名	／著者名	／出版社	／出版年
信州人物風土記・近代を拓く17	中山晋平	宮坂勝彦 銀河書房	1987
いのち短し恋せよ少女	和田登	総和社	2005
中山晋平・人と業績	丸山久雄	中野の文化を進める会	1978
定本・中山晋平	齊藤武雄	郷土出版社	1987

## 西尾実

『岩波国語辞典』（岩波書店）といえば誰もが知っている有名な辞書ですが、この辞典の筆頭編集者に掲げられているのが、今回紹介する西尾実です。西尾は1889（明治22）年5月14日、下伊那郡豊村（現阿南町）和合帯川で、父辯弥、母つたのの次男として生まれました。長野師範学校を卒業後、数年間は県内の尋常高等小学校で教師を務めていましたが、学問への欲求が高まり東京帝国大学を受験して見事合格します。そして年度半ばで教師を退職し入学しました。卒業後は精力的に国語教育に取り組む傍ら、数多くの著書や論文を発表します。戦後の教育制度改革が進む中で、国語に関する多方面からの研究を進める機関として1949（昭和24）年1月に国立国語研究所が設立され、西尾は初代所長に任命されました。西尾はこの所長としての経験から、次代を担う子どもたちに「ことば」に目を向けさせ、大切にしよう育てなければと思うようになりました。そのために国語の授業の充実の必要性を感じ、長野県の教科書の監修という大きな仕事をつとめました。そうして出来た信教版小学校国語教科書は、1955（昭和30）年長野県のほぼ全域で採用され、使用されるようになりました。1960（昭和35）年緑内障の悪化により視力が衰えてきたため、11年間勤めた国立国語研究所長を辞任しました。1963（昭和38）年には完全に失明してしまいましたが、介添者による書籍・新聞の朗読、手紙の代筆などを続け、口述筆記による論文執筆も続きます。この頃に冒頭の岩波国語辞典の編集にも携わります。翌年には紫綬褒章を受けました。西尾の国語教育界における仕事は枚挙にいとまがありません。戦前は『国語国文の教育』（昭和4、古今書院）、『国語教育の新領域』（昭和14、岩波書店）などがあり、また戦後は『言語教育と文学教育』（昭和25、武蔵野書院）、『国語教育学の構想』（昭和26、筑摩書房）他、多くの著述を発表するとともに日本国語教育学会会長などの要職も務めました。1979（昭和54）年4月16日、東京都杉並の自宅で静かに、眠るように91歳の生涯を閉じました。その生涯は、故郷信州や東京などで教鞭をとり国語教育の指導に携わる一方、国文学の研究に励み多くの業績を残した一生でした。

### <参考資料>

書名	/編著者名	/出版社	/出版年
伝記西尾実 ひと足ひと足	下伊那教育会	信濃教育会出版部	1991
現代国語教育論集成 西尾実	現代国語教育論集成編集委員会	明治図書出版	1993
信州教育のために	西尾実	信濃教育会出版部	1967
教室の人となって 国語教育六十年	西尾実	国土社	1971



## 新田次郎

次郎は1912（明治45）年長野県上諏訪町（現在の諏訪市）大字上諏訪字角間新田で、父・彦、母・りゑの次男として生まれました。本名は藤原寛人（ひろと）といます。新田の次男坊だったため、のちにペンネームを新田次郎としました。1932（昭和7）年、無線電信講習所（現在の電気通信大学）を卒業し、中央気象台（現在の気象庁）に就職します。この年より1937（昭和12）年まで、富士山観測所に勤務していますが、交替勤務で、一度山頂に登ると30～40日は山を降りられないという生活を送っていました。1948（昭和23）年頃からは、アルバイトとして理科の教科書、特に気象関係の執筆を引き受けていました。1951（昭和26）年には妻、藤原ていが昭和24年に刊行した「流れる星は生きている」がベストセラーになったのに刺激され、「強力伝」を「サンデー毎日第41回大衆文芸」に応募し、現代の部一等に入選します。1955（昭和30）年、田村昌進氏との共同研究「無線ロボット雨量計」の功績により、運輸大臣賞を受賞します。翌年には「強力伝」によって第34回（昭和30年下期）直木賞を受賞します。また、その翌年には科学小説、ジュニア小説、山岳小説、メロドラマ等、多方面の短篇小説を数多く手がけ、気象庁の職員と小説家という二足の草鞋を履く、多忙な生活を続けていました。しかし、1966（昭和41）年には気象庁を退職し、筆一本の生活に入ります。気象庁での勤務経験が生かされ、山をテーマにした作品も多くありますが、「山を書いているのではなく、人間を書きたいのだから」と常々語っていたそうです。1980（昭和55）年、次郎は東京都吉祥寺の自宅で心筋梗塞のため急逝しました。1987（昭和62）年には、翌年のNHK大河ドラマが新田次郎原作の「武田信玄」に決定し、信玄ブームが始まり、新田次郎原作によるコミック版「武田信玄」など、関連書物が数多く刊行されました。なお、メールマガジン第42号の郷土ゆかりの作家コーナーには、妻ていが紹介されています。興味のある方はご覧になってみてはいかがでしょうか。

→ <http://archive.mag2.com/0000179345/20071115080000000.html>

### <参考資料>

書名	／著者名	／出版社	／出版年
新田次郎文学事典	新田次郎記念会編	新人物往来社	2005
強力伝	新田 次郎	小学館	1995
武田信玄	新田 次郎	文芸春秋	2005
わが夫新田次郎	藤原 てい	新潮社	1981

## 葉山嘉樹

「自分の心の中に住んでいる利己心と絶えず闘うことが、私の一生涯の仕事だ」  
葉山嘉樹は1894年福岡県豊津町に生まれました。早稲田大学を1年足らずで退学した後、船員、会社員、新聞記者などをしながら労働運動を続けました。1922年治安警察法違反で投獄され、その獄中で書いた小説「淫売婦」「セメント樽の中の手紙」「海に生きる人々」を雑誌「文芸戦線」に発表。大きな反響を呼び、プロレタリア作家の道を拓きました。文学運動仲間の分裂、特高警察の弾圧監視下での生活苦、創作上の行き詰まりなどが重なり、東京から長野県泰阜村に移り住んだのが1934年1月。当時、駒ヶ根市周辺の文学青年たちが同人誌「群衆」を発行しており、その顧問として葉山を迎えようと奔走し、同年9月、駒ヶ根市赤穂に居を移しました。そして翌年には新しい同人誌「信州文化」を創刊しました。「…よし毎日の生活が不足であり、迫害が絶えず襲いかかろうとも、人間の生活から『善』を奪われることを、私たち信州文化の同人たちは、守ろうではないか。文学とはそのようなものだ、と私は思っている。」自らの生活体験を創作活動の糧とし、転向を拒み続け、不遇な時代を生き抜いた葉山嘉樹。葉山にとって赤穂時代は充実した時期であり、その情熱は地元の青年たちに大きな影響を与えました。荒畑寒村ら古い仲間たちが「人民戦線事件」で次々と検挙され、周囲への迷惑を懸念した葉山は1938年赤穂を去りました。その後、夫人の郷里岐阜県中津川市へ移り、さらに山口村開拓団員として渡満します。1945年終戦で引き揚げる途中アメーバ赤痢が悪化し、引き揚げ列車内で51歳の生涯を閉じました。

### <参考資料>

書名	／著者	／出版社	／出版年
葉山嘉樹論「海に生きる人々」をめぐって	浅田隆	桜楓社	1978
葉山嘉樹 考証と資料	浦西和彦	明治書院	1994
葉山嘉樹論 戦時下の作品と抵抗	鈴木章吾	菁柿堂	2005
葉山嘉樹全集 全6巻	葉山嘉樹	筑摩書房	1975～1976
葉山嘉樹建碑記念寄稿集	記念建碑期成会		1985

## 日夏耿之介

日夏耿之助は、1890年(明治23年)下伊那郡飯田町(現飯田市)に生まれました。県立飯田中学では、回覧誌「少年文芸」を編集し、小説や短文を載せ、文学への才能を示していました。

1908年(明治41年)早稲田高等予科に入り、西条八十らと同人誌「聖盃」を創刊し、唯一の戯曲『美の遍路』を発表しました。(第8号より「仮面」と改題。)

第2詩集『黒衣聖母』序文で、自分の詩風を「ゴシック＝ローマン詩体」と称しました。言葉の視覚的造形美と聴覚的音韻律とを錯綜させる独自の詩法と透徹した詩境との高度な融一は『呪文(じゅもん)』において完成確立されました。

1922年(大正11年)から1935年(昭和10年)まで母校早稲田大学で教鞭をとる傍ら、詩人、文学者、翻訳家として多彩な文芸活動を展開し、「学匠詩人」「思想詩人」と称せられました。

『明治大正詩史』が、1949年(昭和24年)改訂増補され、第1回読売文学賞を受けました。1951年(昭和26年)には、『日本現代詩大系』全10巻で毎日出版文化賞を、翌1952年(昭和27年)には、『明治浪漫文学史』と『日夏耿之助全詩集』により、日本芸術院賞が授与されました。

1953年(昭和28年)、第1回飯田市名誉市民に選ばれ、1971年(昭和46年)81歳で永眠するまで、晩年は郷里で過ごしました。

### <参考資料>

書名	／著者名	／出版社	／出版年
日本近代文学大事典		講談社	1977
日本現代詩辞典	分銅惇作ほか	桜楓社	1986
日夏耿之助詩集	日夏耿之助	思潮社	1976
日本の詩歌 12	日夏耿之助ほか	中央公論新社	2003
明治大正詩史	日夏耿之助	新潮社	1929
日夏耿之助全集 全8巻	日夏耿之助	河出書房新社	1978
日本芸術学の話	日夏耿之助	新樹社	1972
竹枝町巷談 自伝	日夏耿之助	南信州新聞社	1997
サバト恠異帖	日夏耿之助	筑摩書房	2003
日夏耿之助文集	日夏耿之助	筑摩書房	2004

<p><b>平林たい子</b></p>	<p>プロレタリア作家として波乱の生涯を生き、『施療室にて』『こういう女』などの作品を著して昭和に活躍した平林たい子は明治 38 年（1905）10 月 3 日、諏訪郡中洲村（現・諏訪市中洲）に、父平林三郎、母かつ美の第 6 子として誕生しました。本名はタイ。平林家は明治 5 年まで村の名主をつとめる旧家であり、祖父増右衛門は製糸業を創業しますがその後倒産。負債処理のため父は奔走し、母が農業のかたわら開いた雑貨店の店番を、幼ないたい子は任されたといひます。明治 45 年（1912）4 月、尋常小学校に入学したたい子は恩師川上茂と出会い、『土』などの自然主義文学や雑誌『白樺』の作品に接して文学的影響を強く受けます。大正 7 年（1918）、首席で入学した諏訪高等女学校（現諏訪二葉高等学校）の校長は当時アララギ派の歌人土屋文明でしたが、大正デモクラシーの時代、たい子の関心は文学、政治、社会問題へと向かいました。社会主義者堺利彦に手紙を出し上京するのもこの頃でした。大正 11 年（1922）卒業と同時に上京、その後アナーキストグループと近くなり、関東大震災の時には検挙、留置されています。朝鮮、旧満州流浪後、雑誌『文芸戦線』に初の作品「婦人作家よ、娼婦よ」が掲載されたのは大正 14 年（1925）20 歳の時でした。以来、プロレタリア文学の花形として一時代を画し、昭和 47 年（1972）2 月 17 日 66 歳で死去するまでのたい子の人生は、多感な少女時代そのままに、故郷諏訪の地で育てられた反骨精神に貫かれたものでした。死の翌年、諏訪市中洲福島に平林たい子記念館が竣工されています。</p> <p>&lt;参考資料&gt;</p> <table border="0"> <thead> <tr> <th>書名</th> <th>/著者名</th> <th>/出版社</th> <th>/出版年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>平林たい子全集 全 12 巻</td> <td>平林たい子</td> <td>潮出版社</td> <td>1979</td> </tr> <tr> <td>人物書誌大系 11 平林たい子</td> <td>阿部浪子編</td> <td>日外アソシエーツ</td> <td>1985</td> </tr> <tr> <td>信州人物風土記・近代を拓く 8 平林たい子</td> <td></td> <td>銀河書房</td> <td>1986</td> </tr> <tr> <td>燃えて生きよ-平林たい子の生涯</td> <td>戸田房子</td> <td>新潮社</td> <td>1982</td> </tr> </tbody> </table>	書名	/著者名	/出版社	/出版年	平林たい子全集 全 12 巻	平林たい子	潮出版社	1979	人物書誌大系 11 平林たい子	阿部浪子編	日外アソシエーツ	1985	信州人物風土記・近代を拓く 8 平林たい子		銀河書房	1986	燃えて生きよ-平林たい子の生涯	戸田房子	新潮社	1982
書名	/著者名	/出版社	/出版年																		
平林たい子全集 全 12 巻	平林たい子	潮出版社	1979																		
人物書誌大系 11 平林たい子	阿部浪子編	日外アソシエーツ	1985																		
信州人物風土記・近代を拓く 8 平林たい子		銀河書房	1986																		
燃えて生きよ-平林たい子の生涯	戸田房子	新潮社	1982																		
<p><b>藤森栄一</b></p>	<p>藤森栄一は明治 44 年（1911 年）に上諏訪町（現諏訪市）に生まれました。小学生のころから考古学に関心を持ち、旧制諏訪中学へ進学後は三沢勝衛の指導などを得、すでに校友会誌へ考古学の研究論文を発表しました。昭和 8 年（1933 年）に上京して東京考古学会東京研究所を開設し、森本六爾の教えを受けました。昭和 11 年（1936 年）に就職のため大阪へ居を移して結婚。近畿地方や九州方面の発掘・研究を重ねました。昭和 16 年再び東京に移り葦牙（あしかび）書房を開業し、主に考古学関係の出版を始めました。次第に戦争色が濃くなり、教育も皇国史観が席卷していく中で、正確な資料や根拠に基づかない当時の歴史を批判し「脚のない古代史」を発表しました。やがて戦争により徴兵され、中国・南方方面へ配置されました。</p>																				

九死に一生を得て昭和 21 年(1946 年)復員。昭和 23 年(1948 年)諏訪において古書店あしかび書房を開店しました。また、諏訪考古学研究所を開設し、後進の指導にあたりました。教科書をスミ塗りして使う教育の中で、科学的な証拠に基づき真実を伝える考古学の世界は、若者たちに大きな導きの光を与えました。このころ著した『かもしかみち』は、人類への愛を伏線に学問探求の厳しさを説いたもので、ベストセラーとなり、いまだに考古学を志す者の聖典的存在となっています。

その後、諏訪地方の遺跡を中心に発掘調査にあたるかたわら、考古学、諏訪信仰、古代史、民俗、科学など博物学的に研究を重ね、論文・著作を多数発表しました。森本六爾の弥生農耕論を下地に富士見町・井戸尻遺跡群の調査成果などを踏まえて、画期的な「縄文農耕論」を提唱しました。著作『銅鐸』では、毎日出版文化賞を受賞。

また『心の灯』ではサンケイ児童出版文化賞を受賞。各地でスライドを上映しながら講演会を開催し、考古学や歴史的なものの考え方を、分かりやすく広く多くの地元住民に伝える啓発活動を大切にしました。

また、ビーナスライン建設にあたっては、医師・青木正博らと御射山遺跡や霧ヶ峰の自然保護を訴えました。

長野県考古学会会長を努め、昭和 48 年(1973 年)の没後は業績を記念して藤森栄一賞が設けられました。

#### <参考資料>

書名	／著者名	／出版社	／出版年
銅鐸	藤森栄一	学生社	1964 年
古道	藤森栄一	学生社	1966 年
かもしかみち	藤森栄一	学生社	1967 年
考古学とともに	藤森栄一	講談社	1970 年
心の灯	藤森栄一	筑摩書房	1971 年

## 藤森成吉

『何が彼女をそうさせたか』――見、流行のドラマのような名前ですが、これは昭和2年に書かれた作品のタイトルで、『蟹工船』（小林多喜二／著）等に並ぶプロレタリア文学史におけるベストセラーの1つです。著者の藤森成吉は明治25年（1892）8月28日に、上諏訪町（現諏訪市）に古い薬種商の長男として生まれました。諏訪中学から第一高等学校、東大独文科と進み、主席で卒業しています。東大在学中に窪田空穂にすすめられて自費出版した『波』（大正9年に『若き日の悩み』と改題して新潮社から公刊）が様々な作家に認められ、新進作家の仲間入りをしました。この作品は、人生何をなすべき、に悩む人道主義的青年が主人公でしたが、時代の背景にせきたてられて、藤森自身は社会主義の方向に流れていきました。24歳（大正5年）の時、岡倉天心の実弟である由三郎の娘、信子と結婚します。その後、いくつかの作品の印税が入ったため、昭和5年1月に夫妻で渡欧し、ベルリンに2年ほど滞在しました。ところが、帰国後すぐに共産党に資金を供与したという治安維持法違反により逮捕されてしまいます。そして結局藤森は共産主義から転向させられることになり、作品の方向性もプロレタリア文学から歴史文学の分野へと転向していきました。その頃の代表作としては『渡辺華山』（昭和10年）、『若き啄木』（昭和14年）などがあります。昭和23年には、妻信子の体調を考慮して神奈川県逗子へ移住します。その年の暮れに、共産党へ入党し、それを契機に「人民文学」を創刊しました。その後は再びプロレタリア文学の長老として創作活動を行うようになりましたが、次第に画人評伝などに活動の分野を開拓していきました。『渡辺華山の人と芸術』（昭和39年）、『知られざる鬼才、天才』（昭和40年）などが労作として評価を得ています。昭和50年（1975）に処女作『波』の出版六十周年を記念して、伊豆大島に文学碑が建てられました。その頃だんだんと体調が悪くなってきていた藤森は昭和52年（1977）5月26日に、日課としていた散歩に出かけた折にトラックにはねられたことが原因で亡くなりました。84歳でした。没後、諏訪湖畔に藤森の歌碑が建てられるとともに、神奈川県立近代文学館へ資料約二千点が寄贈されました。また諏訪市図書館にも藤森成吉文庫が設置されています。

### <参考資料>

書名	／著者名	／出版者	／出版年独
白の女	藤森成吉	未来社	1973
知られざる天才、鬼才	藤森成吉	春秋社	1965
鳩を放つ	藤森成吉	玄文社	1924
詩曼陀羅	藤森成吉	春秋社	1975
たぎつ瀬：作家藤森成吉略伝	藤森岳夫	中央公論事業出版	1986

## 保科百助

百助は 1868 年(明治元年)、北佐久郡横鳥村(現在の立科町)に生まれました。1891 年(明治 24 年)、長野師範学校卒業後、県内各地の小学校の教員、校長を歴任し、在職中鉱物岩石の採集に努め、地質学の研究者として名をなしました。信州教育を語る時、明治後期の教育界の中で、百助は欠くことのできない存在です。

小学校長として赴任した際、白ズボン、白シャツ、麦藁帽子、ハンマー、雑のう携帯の鉱物採集スタイルで現れ、村民を驚かせるなど、奇行に富んだ人ともいわれていますが、部落差別の撤廃と同和教育に力を尽くし、貧困家庭の子弟のために私塾を設立しました。信濃図書館(県立図書館の前身)の創設にも功績がありました。

百助は五無齋という号を持ちます。1896 年(明治 29 年)頃採集旅行中に草鞋(わらじ)が破れ、新しいものを買おうとしたところ、一厘不足であったため値引きを掛け合った折に次のような狂歌を詠んだそうです。

「おあしなし 草鞋なしには 歩けなし おまけなしとは おなさけもなし」  
この五つの「なし(無)」を含む狂歌にちなんで、「五無齋」という号にしたといっています。

百助は、1911 年(明治 44 年)に 44 歳で亡くなりました。郷里の津金寺に葬られ、同寺には明治 45 年 5 月に建てられた「五無齋保科百助碑」があり、長野の加茂神社境内には大正 2 年に門人・知人により建てられた碑があります。

### <参考資料>

書名	／著者	／出版者	／出版年
五無齋と信州教育	平沢信康	学文社	2001
五無齋保科百助全集	保科百助	信濃教育会出版部	1964
五無齋保科百助評伝	佐久教育会保科五無齋研究委員会	佐久教育会	1969

## 堀辰雄

昭和初期に活躍した作家、堀辰雄は1904（明治37）年12月28日に東京麹町で生まれました。辰年生まれということで、辰雄と命名され、父は堀浜之介、母は西村志気（しげ）。浜之介には国許に妻がいましたが、病気がちで子供がいなかったため、辰雄は嫡子として届けられました。中学時代は数学が好きで、数学者になることを夢見ていましたが、第一高等学校理科乙類へ入学して知り合った神西清（じんざいきよし）の影響で、文学に興味を持つようになりました。神西とは、終生親交を結び続けました。そして室生犀星や芥川龍之介と知り合い大きな影響を受け、小林秀雄や永井龍男らの同人誌に作品を寄せたり、中野重治や窪川鶴次郎と同人誌『驢馬』を創刊したりしました。室生犀星と芥川龍之介を師と仰ぐ一方、フランスの心理主義文学に強い関心、影響を受け、詩やエッセイ、コクトーなどの翻訳を發表しました。1930（昭和5）年、芥川の死と自分自身の恋愛をもとに書いた小説『聖家族』で文壇デビュー。この頃から肺を病み、軽井沢などで療養することが多くなり、その体験をもとにした作品をいくつも發表しました。なかでも1935（昭和10）年に結核で亡くなった、婚約者・矢野綾子との富士見高原療養所での二人の生活をもとにしてえがいた長編小説『風立ちぬ』は、堀の代表作として有名です。マルセル・プルーストなどのヨーロッパ文学に触れ、自身の作品を深めていきながらも、折口信夫の門弟と『伊勢物語』も学び、また折口信夫本人から日本の古典文学の手ほどきを受け、王朝文学に題材を得た『かげろふの日記』などを書き上げました。戦争末期からは病気も重くなり、1944（昭和19）年からは信濃追分に定住し、作品を發表することなく療養に専念しましたが、1953（昭和28）年に49歳で亡くなりました。軽井沢町にある「堀辰雄文学記念館」には、原稿・書簡・初版本・遺愛の品々の他に、晩年を過ごした住居や愛蔵書を見ることができ、また周辺の散策を楽しむこともできます。また富士見町にある「富士見町高原のミュージアム」には、「風立ちぬ」の舞台となった富士見高原療養所（現・富士見高原病院）に関わる資料が常時展示されています。

### <参考資料>

書名	／著者名	／出版社	／出版年
不器用な天使	堀辰雄	改造社	1930
妻への手紙	堀辰雄	新潮社	1959
風立ちぬノオト	大城信栄	思潮社	1973
雲流れる高原	日達良文	長野日報社	2005



## 正木不如丘

不如丘は明治 20（1887）年、長野町（現長野市）で生まれました。本名は正木俊二といいます。

大正 2（1913）年、東京大学医学部を優秀な成績で卒業。福島共立病院副院長を経て、パリのパスツール研究所に留学しました。帰国後、慶応大学医学部内科助教授となり、そのかたわら朝日新聞に『診療簿余白』を連載して好評を博し、続いて『三十前』『木賊の秋』『思われ人』などを発表しました。

慶応大学医学部内における対立から、昭和 1（1926）年富士見高原療養所へ赴任しました。しかし僻地での病院運営は困難を極め、医者や看護婦に給料が払えず、不如丘は印税を診療所の経営に充てたといわれています。不如丘はスイスで視察見学した結核療養所（サナトリウム）を開設しようと思立ち、病院の借金を肩代わりして運営を維持しました。そして彼の「高原のサナトリウム」は全国的に知名度を上げていきました。療養所の経営が安定した昭和 23（1948）年、『果樹園春秋』を最後に彼は創作の筆を絶ちました。

寒いから風邪を引くのだと思っているのが大間違いである。風邪が一番多いのは冬ではない、春と秋が最も風邪の多い時期である。而も寒い日でなくむしろあつい雨の日に却つて風邪を引くのである。とにかく寒いから風邪を引くと思うのが大変な思い違いであるのをよく知っておかなくてはならない。

『療養三百六十五日』より

不如丘の穏やかな文面からは彼の誠実で真摯な人柄が偲べれます。

結核治療と富士見高原療養所のために人生を捧げた不如丘は、結核が「過去の病」になりつつあった昭和 37（1962）年、その使命を終えたかのように 75 年の生涯を静かに閉じました。

### <参考資料>

書名	／著者名	／出版社	／出版年
正木不如丘作品集 1 巻～7 巻		正木不如丘作品集刊行会	1967
正木不如丘文学への誘い	児平美和	万葉書房	2005
いざ生きめやも	正木不如丘ほか	郷土出版社	2007
療養三百六十五日	正木不如丘	実業之日本社	1940
句歴不如丘	正木不如丘	春陽堂書店	1955

## 松井芒人

芒人は1895年（明治28年）上伊那郡伊那富村（現辰野町）に生まれました。本名は源衛といます。諏訪中学校（現諏訪清陵高校）から長野県師範学校（現信州大学）へすすみ、卒業後は上伊那郡飯島町七久保尋常高等小学校訓導を皮切りに、県内各地で教鞭をとりました。また、伊那小学校、木祖小学校、富士見南中学校などの多くの校歌を作詞しています。1917年（大正6年）アララギに入会し、島木赤彦、土屋文明らと親交を深めながら上伊那地方の人々の短歌指導にあたり、多くの後進を育てました。1931年（昭和6年）芒人は結核で倒れました。その後いくたびか病床につきながらも作歌への情熱は衰えませんでした。芒人の歌には気負いや激しさがなく、滋味と現実味の加わった独特の風格があると評されています。 登り来て振り返り見る坂の上国美しき四季の移ろひ伊那谷に生まれ、伊那谷に短歌の灯をともし続けた松井芒人は、1980年（昭和55年）86歳の生涯を静かに閉じました。

### <参考資料>

書名	／著者名	／出版社	／出版年
信州伊那谷の歌人群像	堀江玲子	信濃毎日新聞社	1994
松井芒人論	新井章	教育出版センター	1983
青野風	松井芒人	白玉書房	1959
自選歌集草のつゆ	松井芒人	いぶき社	1960

## 丸岡秀子

1903年丸岡秀子は南佐久郡臼田町に生まれました。生後10ヶ月で生母と死別し、少女期を中込村（現佐久市）の母方の祖父母のもとで過ごしました。祖父母の家は大変貧しく、秀子はその中で現実の厳しさを知り、他者をいたわる優しさを身につけていきました。

その後長野県立高等女学校（現長野西高等学校）から奈良女子高等師範学校（現奈良女子大学）へと進み、卒業後は三重県女子師範学校（現三重大学教育学部）の教師として社会人の一歩を踏み出します。

1925年秀子は上京して東洋経済新報社社員の丸岡重堯と結婚しますが、わずか4年で夫を腸チフスで亡くしました。その後、産業組合中央会職員として生活改善啓蒙の講演を各地で行うかたわら家庭教師をし、家に下宿人を置いて生活を支えました。

経済恐慌下の苦しい生活の中、全国を歩いて農村婦人の生活実態調査を行い、1937年「日本農村婦人問題」として発表します。これは農村女性問題の古典と言える名著で、その後の活動の出発点となりました。秀子は農村問題、教育問題、生協運動、母親運動、保健婦支援など幅広い分野で活躍し多くの著作をのこしました。

「わたしとあなたの間にはいのちがある。その間にあるいのちを大切に」

丸山秀子が87年の生涯を賭け紡ぎだした言葉の数々。それらは混迷の世を照らす光のように私たちの胸に迫ってきます。

### <参考資料>

書名	／著者名	／出版社	／出版年
自立の開拓者丸岡秀子	成沢むつ子	創風社	1999
ひとすじの道を生きる	丸岡秀子写真集編集委員会	ドメス出版	2000
田村俊子とわたし	丸岡秀子	中央公論社	1973
丸岡秀子評論集 1～10	丸岡秀子	未来社	1979～1991

<p><b>三沢勝衛</b></p>	<p>三沢勝衛は1885年（明治18年）更級郡三水村（現長野市）に生まれました。尋常高等小学校高等科を卒業後、反対する親を説き伏せて尋常小学校の代用教員となり、県内各地の小中学校に勤務しながら地理学、鉱物学、天文学に打ち込み、独創的な風土論を展開しました。その業績は中央の学者たちにも高く評価されています。また野外調査を重視する教育で、教え子たちに自分の頭で考える大切さを教えました。「風土は大自然である。大地の表面と大気の底面との接触からなる一大化合物である…」「教科書は古墳にして、著作は墓場であり、学会は戦場である」勝衛は1937年（昭和12年）胃がんのため52歳の若さでこの世を去りました。1965年（昭和40年）諏訪清陵高等学校内に「三沢勝衛先生記念文庫」がつけられ、約140点の論文・著作、7,000冊を越える雑誌、3,000冊余の単行本などが収蔵されています。</p> <p>&lt;参考資料&gt;</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>書名</th> <th>／著者名</th> <th>／出版社</th> <th>／出版年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>三沢勝衛先生</td> <td>三沢先生記念文庫発起人会</td> <td></td> <td>1965</td> </tr> <tr> <td>長野市の先人に学ぶ3</td> <td>長野市校長会</td> <td>長野市教育委員会</td> <td>1992</td> </tr> <tr> <td>信州教育の墓標</td> <td>藤森栄一</td> <td>学生社</td> <td>1973</td> </tr> <tr> <td>三沢勝衛著作集</td> <td>矢澤大二</td> <td>みすず書房</td> <td>1979</td> </tr> </tbody> </table> <p>信濃毎日新聞 連載『時代を駆ける』1998年3月13日～3月17日</p>	書名	／著者名	／出版社	／出版年	三沢勝衛先生	三沢先生記念文庫発起人会		1965	長野市の先人に学ぶ3	長野市校長会	長野市教育委員会	1992	信州教育の墓標	藤森栄一	学生社	1973	三沢勝衛著作集	矢澤大二	みすず書房	1979
書名	／著者名	／出版社	／出版年																		
三沢勝衛先生	三沢先生記念文庫発起人会		1965																		
長野市の先人に学ぶ3	長野市校長会	長野市教育委員会	1992																		
信州教育の墓標	藤森栄一	学生社	1973																		
三沢勝衛著作集	矢澤大二	みすず書房	1979																		
<p><b>宮口しづえ</b></p>	<p>1907年、北佐久郡小諸町（現小諸市）袋町に生まれました。松本女子師範学校在学中に、島木赤彦らに師事して短歌を作り、また島崎藤村の本を愛読していました。卒業後、島崎藤村にあこがれていた宮口は、自ら志願して藤村のふるさと神坂小学校に勤務しました。結婚後退職し、夫の病死の後、「島崎藤村全集編纂室」に勤務するかたわら、藤村記念堂建設を手伝いました。</p> <p>この編纂がきっかけで、坪田譲治に師事して童話の勉強を始めました。その後病氣療養しながら、童話を書き始めた宮口は57年、50歳のとき短編集『ミノスケのスキー帽』を発表し、日本児童文学者協会新人賞を受賞しました。それから『宮口しづえ童話全集』に至るまで20年間童話作家として活躍し、信州の風土と生活に根ざした長編でその地位を築きました。</p> <p>信州児童文学会名誉会長でもあった宮口はまた、同会発行の雑誌「とうげの旗」では創刊号から短編を発表しつづけました。</p> <p>94年脳梗塞のため、木曾郡山口村（現岐阜県中津川市）で逝去しました。</p> <p>&lt;参考資料&gt;</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>書名</th> <th>／著者名</th> <th>／出版社</th> <th>／出版年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ミノスケのスキー帽</td> <td>宮口しづえ</td> <td>筑摩書房</td> <td>1957</td> </tr> </tbody> </table>	書名	／著者名	／出版社	／出版年	ミノスケのスキー帽	宮口しづえ	筑摩書房	1957												
書名	／著者名	／出版社	／出版年																		
ミノスケのスキー帽	宮口しづえ	筑摩書房	1957																		

	宮口しづえ童話全集 1～8 宮口しづえ 筑摩書房 1979 宮口しづえ追悼 牛丸 仁（編） 信州児童文学会 1996																								
<b>宮下正美</b>	<p>宮下正美は 1901（明治 34）年、下伊那郡高森町で生まれました。木曾山脈の山ふところである伊那谷で少年時代を送りました。汽車も電車もない山村の村で、旧制飯田中学 4 年生の時、初めて海というのを見て感激したそうです。後に東京に出て、慶応義塾大学文学部心理学科を卒業し、慶応大学付属幼稚舎に就職しました。22 年に及ぶ長い間教鞭をとり、日々子どもたちと過ごしました。太平洋戦争後、小泉信三先生に勧められ、1946（昭和 21）年藤沢市に創設された湘南学園の園長となり、1958（昭和 33 年）に退任後も同学園の顧問として残るかたわら杉野学園女子大学の教授を務めました。児童教育やしつけに関する啓蒙活動を熱心に続け、中でも子どもたちに優れた読み物を選んで与えることの必要性、児童の読書は学校において特定の時間に教師によって積極的になされることが必要で、さらに学校と家庭との連絡、児童図書館の利用等を盛んにすべしと語られました。また学生時代から「お伽会」、「童謡の会」などをよく開き、その頃から童話や童話劇を書いていました。『愛犬バック物語』『ふしぎな時計』『ブーカー・ワシントン黒人の父』など多くの児童文学の作品を発表しました。こうした活動が評価され、神奈川県社会教育委員、藤沢市教育委員を務め、またサンケイ文化賞、神奈川県教育功労賞等を受賞しています。1982（昭和 57）年に 81 歳の生涯を閉じました。</p> <p>&lt;参考資料&gt;</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>書名</th> <th>／著者名</th> <th>／出版者</th> <th>／出版年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>まちがったしつけ</td> <td>宮下正美</td> <td>ポプラ社</td> <td>1958</td> </tr> <tr> <td>こどもの科学ものがたり</td> <td>宮下正美</td> <td>ポプラ社</td> <td>1960</td> </tr> <tr> <td>子どもを伸ばす環境</td> <td>宮下正美</td> <td>東都書房</td> <td>1961</td> </tr> <tr> <td>しつけの知恵</td> <td>宮下正美</td> <td>青い鳥社</td> <td>1966</td> </tr> <tr> <td>お話の仕方・聞かせ方</td> <td>宮下正美</td> <td>青い鳥社</td> <td>1969</td> </tr> </tbody> </table>	書名	／著者名	／出版者	／出版年	まちがったしつけ	宮下正美	ポプラ社	1958	こどもの科学ものがたり	宮下正美	ポプラ社	1960	子どもを伸ばす環境	宮下正美	東都書房	1961	しつけの知恵	宮下正美	青い鳥社	1966	お話の仕方・聞かせ方	宮下正美	青い鳥社	1969
書名	／著者名	／出版者	／出版年																						
まちがったしつけ	宮下正美	ポプラ社	1958																						
こどもの科学ものがたり	宮下正美	ポプラ社	1960																						
子どもを伸ばす環境	宮下正美	東都書房	1961																						
しつけの知恵	宮下正美	青い鳥社	1966																						
お話の仕方・聞かせ方	宮下正美	青い鳥社	1969																						
<b>向山雅重</b>	<p>民俗学者の向山雅重は 1904 年、宮田村の農家の次男として生まれました。1919 年に高等小学校を卒業後、家が貧しいために進学できず家の手伝いをしていましたが、翌年上伊那にできた教員養成所が家からも通えて月謝もいらないと知ると、一年間そこへ通って学び、17 歳の時宮田尋常高等小学校准訓導となりました。当時の授業には郷土科という科目があり、向山自身が学生時代から面白いと思っていたこの郷土科をどう生徒たちに教えるか考えていたとき、諏訪に住む風土地理の唱和者・三沢勝衛の存在を知り、訪ねました。三沢勝衛と出会い、その現地調査に同行するようになったことで、向山は現地に立って物を見る大切さを</p>																								

知り、どのように生活や風土を見つめるべきかを学んだといいます。

教師として働く傍ら、精力的に現地調査に出かけ、衣食住から農耕、狩猟、民具、信仰、年中行事、民俗芸能など、身の回りにあるもの全てを調査の対象とした向山は、聞いた話や見たものを「野帳」というノートに小さな字でぎっしりと書き連ねられました。またそこにはスケッチも多く残され、たとえ数本の線だけでも書くことが大切だと残しています。

向山は誰も気にとめないような何気ないものに目を向け、「ごく当たり前の人の声を聞かなくては民俗にならない」と言って誰にでも声をかけて話を聞き、食べ物は食べてみる、衣服は着てみるというように、実際に触れてみることで調査を奥深いものにしていきました。

『山村小記正』や『信濃民俗記』といった自著の発行の他に、『下伊那誌』の編集委員や『長野県史』の民俗編集委員等を務めたりし、いくつもの賞を受賞しました。

60年もの間民俗の研究に携わり続けた向山の「野帳」や多くの蔵書は、宮田村の宮田村民会館内にある「向山雅重民俗資料館」で見ることができます。

#### <参考資料>

書名	／著者	／出版社	／出版年
山村小記正	向山雅重	山村書院	1941
山国の生活誌 1～5	向山雅重	新葉社	1987～1988
山ぶどう 1	向山雅重	宮田新聞社	1965
伊那谷の民俗学を拓いた人びと	柳田國男記念伊那民俗学研究所	信州新聞社	1991

## 椋鳩十

1905年、下伊那郡喬木村に生まれました。本名は久保田彦穂（ひこほ）。豊かな自然の中、自然や動物と親しんで育ち、小学生のときに読んだ「ハイジ」に深い感銘を受けたそうです。旧制飯田中学（現・長野県飯田高等学校）から、法政大学文学部国文科へ進学すると、詩人を志し、詩作に励みました。卒業後鹿児島に移り住み、教員を勤めながら『椋鳩十』のペンネームで山窩（さんか）小説を書きはじめ、33年に最初の小説「山窩調」を自費出版しました。その後春秋社から「鷺の唄」が出版されましたが、これは反良俗的小説ということですぐに発禁処分になってしまいました。けれど「山窩調」で高い評価を得、翌年の朝日新聞の夕刊に「山の天幕」が掲載されました。その後少年雑誌『少年倶楽部』編集長・須藤憲三に勧められて書いた児童向け作品「山の太郎熊」が、『少年倶楽部』38年の10月号に掲載され、これをきっかけに動物作家としての地位を確立していきました。そして赤い鳥文学賞など多くの賞を受けました。その後47年に鹿児島県立図書館長に就任すると、創作活動と並行して読書運動を推進し、『母と子の20分間読書運動』を提唱しました。66年に鹿児島県立図書館長を退任し、翌67年鹿児島女子短期大学教授（児童文学・図書館学）兼図書館長を務め、78年に退任するまでの間にいくつもの作品を発表しながら、読書活動の普及のため長野や愛知等へ講演行脚を行いました。1987年12月27日、肺炎のため逝去（82歳）。

### <参考資料>

書名	／ 著者	／ 出版社	／ 出版年
村々に読書の灯を	椋鳩十	理論社	1961
ねしょんべんものがたり	椋鳩十	童心社	1971
山の太郎熊	椋鳩十	小学館	2004
椋鳩十の世界	たかし よいち	理論社	1982
日本児童文学 1980年6月号	日本児童文学者協会	偕成社	1980

## 山室静

山室静は詩人、作家、児童文学者、そして「アンデルセン」の翻訳や「ムーミン」など北欧文学の紹介者として知られていますが、今年が生誕 100 年になります。山室静は 1906 年鳥取市で生まれ、1914 年に父親の死にともない現在の佐久市の親戚に引き取られました。戦前から文芸評論などで活躍。戦後、小諸市で青少年教育のための「高原学舎」を設立し、堀辰雄らと季刊誌「高原」を創刊。また 1946 年、本多秋五、埴谷雄高らと共に「近代文学」の創刊に加わりました。

その後も文芸評論家として活躍、またアンデルセン、イプセン、ヤコブセンなどの作品や世界の昔話などの訳書を多数刊行しました。そして 2000 年 3 月に 95 歳で亡くなりました。

1982 年に自宅の書斎が火事になり、約 5,000 冊の蔵書を焼失。この中にはアンデルセンについての内外の研究書約 100 冊、北欧古代中世文学書と辞典類のほか研究テーマとしてきた神話民話関係の原書の殆どが含まれていて、北欧文学からの引退を表明したほどの強い衝撃を受けましたが、この火災の報道を見た友人教え子等が大勢駆けつけて焼け跡は 2 日で片付き、また読者である全国の小中学生から激励の手紙などが寄せられるなどして大いに勇気付けられたというエピソードもあります。

山室静の著書、訳書は多数ありますが、郷土ゆかりの作家コーナーにある著作の一部と関係書をご紹介します。なお、郷土ゆかりの作家コーナーの図書は貸出ができませんが、児童図書室・一般図書室の図書については貸出可能ですのでご利用ください。

### <参考資料>

書名	／著者名	／出版社	／出版年
北欧文学の世界	山室静著	東海大学出版会	1969
ムーミン童話全集	トーベ・ヤンソン作・絵 山室静訳	講談社	1990
アンデルセン童話集	アンデルセン著 山室静訳	偕成社	1978
ちいさいロッタちゃん	アストリッド・リンドグレーン作 山室静訳	偕成社	1985
山室静著作集	山室静著	冬樹社	1972～1973
山室静自選著作集	山室静著	郷土出版社	1992～1993
山室静とふるさと	荒井武美著	一草舎	2006



## 湯本武比古

皆さんは“ポチ”と聞いて何を連想しますか？たぶん多くの方が“犬”を思い浮かべると思います。さてこのポチという名前はどのようにして犬に付けられるようになったのか。実はこのポチの名づけの親が湯本武比古なのです。湯本武比古は江戸時代末期に現在の中野市に生まれました。長野市や松本市で教職につきますが、学問への希求がつのり23歳にして職を辞し単身上京します。東京師範学校中学師範科を卒業し、幾許（いくばく）もなく文部省に勤めることとなります。そこで日本の国語（読本）教科書の先駆けとなる『読書入門』を編集するのです。カナ五十音を一字ずつ取り上げて文章にして教えるという作りの編集でしたが、「ポ」の文章を作る段になってはたと行き詰まってしまったそうです。当時の日本語に「ポ」で始まる単語がなかなかなく、湯本武比古は苦心の末「ポチ」という無意義の呼び名をつくり、犬の呼び名として次の文章と犬の絵を『読書入門』に載せました。ポチハ、スナホナイヌナリ。ポチヨ、コイトダンゴヲヤルゾ。パンモヤルゾ。

（『読書入門』文部省 明治19年9月刊）これが面白い言葉だったので何時とはなしに全国にひろまった、と『故湯本武比古先生』という記念誌に教え子の蟻川英夫が書いています。ために「ぼち」という言葉を辞書でひくと

犬につける名。特に、明治三、四〇年代に流行した。

（『日本国語大辞典』第2版 日本国語大辞典第二版編集委員会編 小学館2001）

とあり、またこの辞書には二葉亭四迷が小説『平凡』（明治40年）で犬の名として使っているという用例がでています。語源については諸説があるようですが、“ポチ”が日本で犬の名として定着していくもともとが湯本武比古の『読書入門』であるというのは年代的に見てもかなり信憑性があるのではないのでしょうか。

湯本武比古はこの後大正天皇の教育係を務めたり、国語調査委員会の初代委員となったりして明治の教育者の一人として足跡を残します。

現在『北信ローカル』北信エルシーネットという新聞（週刊）で、上原左之治さんが「明治の教育者湯本武比古を偲ぶ」という連載をされています。湯本武比古をもっと知りたい方はぜひご覧下さい。

### <参考資料>

書名	／著者名	／出版者	／出版年
『故湯本武比古先生』	林竹次郎編	京北中学校	1928
『湯本武比古選集』	信濃教育会編	信濃教育会	1955
『北信ローカル』	北信エルシーネット	平成19年6月22日～8月17日刊号	
『読書入門』	文部省編輯局編	1896（国立国会図書館近代デジタルライブ	

	ラリーより)
--	--------